

# 小和田館跡

## (小和田北遺跡)

県営圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1986・3

長坂町教育委員会  
峡北土地改良事務所

# 小和田館跡

## (小和田北遺跡)

県営圃場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1986・3

長坂町教育委員会  
峡北土地改良事務所

## 序 文

私たちが住んでいる長坂町の現在の姿も、これから何世紀か後の人々にとっては遠い過去のものとして眺められる訳で、私たちの郷七長坂がどのような経過をたどって成り立ってきたのか、多くの先人たちの残したものを持ち子孫たちへ、大いなる遺産として伝えていくことが、現在に生きる私たちに課せられた大きな使命であると痛感いたします。

長坂町では、県営調査整備事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査を実施しており、本年度も58年・59年度に引き続き小和田館跡の調査を行ないました。その結果全国的に類例のない金箔を付した草木文様のある銅製碗蓋や、数多くの中国製青磁片が出土いたしました。これらの資料は長坂町の中世史を解明するのみでなく日本の中世史を研究する上でも非常に貴重な資料であります。ここにその成果を公けにし、広く活用いただければ、と思います。

最後に、本発掘調査にあたり、御指導いただきまして県教育庁文化課関係各位、また深い御理解のもと、多大の御協力をいただきました地元の皆様に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

昭和61年3月

長坂町教育委員会

教育長 向井正汎

## 例　　言

- 1 本書は昭和60年度県営圃場整備事業に伴う小和田北遺跡の調査報告書である。
- 2 本調査は峡北土地改良事務所との負担協定により、文化庁・山梨県より補助金を受けて長坂町教育委員会が昭和60年7月1日より9月10日にかけて実施した。
- 3 本書の報告は第Ⅰ章を坂本正輝が、第Ⅱ～VI章を鈴木治彦が執筆した。
- 4 本書で使用した実測・トレース・写真は鈴木によるものである。
- 5 本書の編集は鈴木が行なった。
- 6 銅製品の修復・保存処理・分析は東京国立博物館 桜井洋氏にお願いした。
- 7 本書の作成にあたって、下記の方々より御教示をいただいた。記して感謝する次第である。

青木繁夫・秋山 敏・植松又次・香取忠彦・櫛原功一・小林 真  
佐野勝広・信藤祐仁・末木 健・田代 孝・萩原三雄・畑 大介  
橋口清治・平野 修・深沢裕三・八巻与志夫・山路恭之助・  
山下孝司・米田明訓・雨宮正樹・池上 信（順不同）

### 8 調査組織

調査主体 長坂町教育委員会  
調査担当 鈴木治彦  
事務局 長坂町教育委員会  
社会教育主事 坂本正輝  
小林和夫

### 9 調査参加者

小沢 茂	小沢みづえ	鈴木節子	清水光子	滝田武子
島畑松代	長島澄子	日向一子	平島弘子	平島富士子
平島雪枝	保坂和博	堀内よしみ	森沢敏子	

- 10 本調査の出土品、諸記録は長坂町教育委員会が保管している。
- 11 本調査にあたり、峡北土地改良事務所、地権者の方々の御理解、御指導をいただいた。心から謝意を表する次第である。

## 目 次

### 序 文

### 例 言

### 目次・凡例

第I章	調査に至る経緯	2
第II章	調査の方法と経過	6
第III章	遺跡の地理的・歴史的環境	7
第IV章	遺構調査	9
第1節	住居址	9
第2節	掘立柱建物	19
第3節	溝	19
第4節	集石遺構	26
第5節	地下式土壙	29
第6節	土坑	30
第7節	ピット群	31
第V章	出土遺物	44
第1節	土器・陶磁器	44
1	住居址出土土器	44
2	土坑出土土器	47
3	遺構確認而出土土器	47
4	陶磁器	47
第2節	石製品・土製品	50
第3節	金属製品	52
第4節	その他	56
第VI章	考 察	58

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	1	第25図 第21・23・24・25・26・27号土坑	37
第2図 遺跡の立地	3	第26図 第29・30・31・32・33・34号土坑	39
第3図 遺構配置図	4	第27図 第36・37号土坑	40
第4図 第1号住居址	10	第28図 第38・39・40・41号土坑	40
第5図 第1号住居址カマド	11	第29図 第46・47・48・49・50号土坑	41
第6図 第3号住居址	14	第30図 第52・53号土坑	42
第7図 第3号住居址カマド	16	第31図 H—8 グリットピット群	42
第8図 第4号住居址	17	第32図 H—9 グリットピット群	43
第9図 第4号住居址カマド	18	第33図 I—8 グリットピット群	43
第10図 第5号住居址	20	第34図 第1号住居址出土土器	44
第11図 第7号住居址	22	第35図 第3号住居址出土土器	46
第12図 第8号住居址	24	第36図 第1号集石出土土器	47
第13図 第1号掘立柱建物址	25	第37図 遺構確認面出土土器	48
第14図 第1号溝	26	第38図 陶磁器（1）	49
第15図 第1号集石	28	第39図 陶磁器（2）	50
第16図 第4号土坑	29	第40図 石器	51
第17図 第28号土坑	30	第41図 上製品	52
第18図 第43号土坑	31	第42図 砥石	53
第19図 第51号土坑	31	第43図 石臼・石擂鉢・五輪塔	54
第20図 第13・44号土坑（地下式土壤）	32	第44図 古銭	55
第21図 第1・2号土坑、ピット1~3	33	第45図 遺構及び確認面出土金属製品	56
第22図 第3・6・7・8・9号土坑	34	第46図 調査区外五輪塔	57
第23図 第10・11・12・14・15号土坑	35		
第24図 第16・17・18・19・20・22号土坑	36		

## 表 目 次

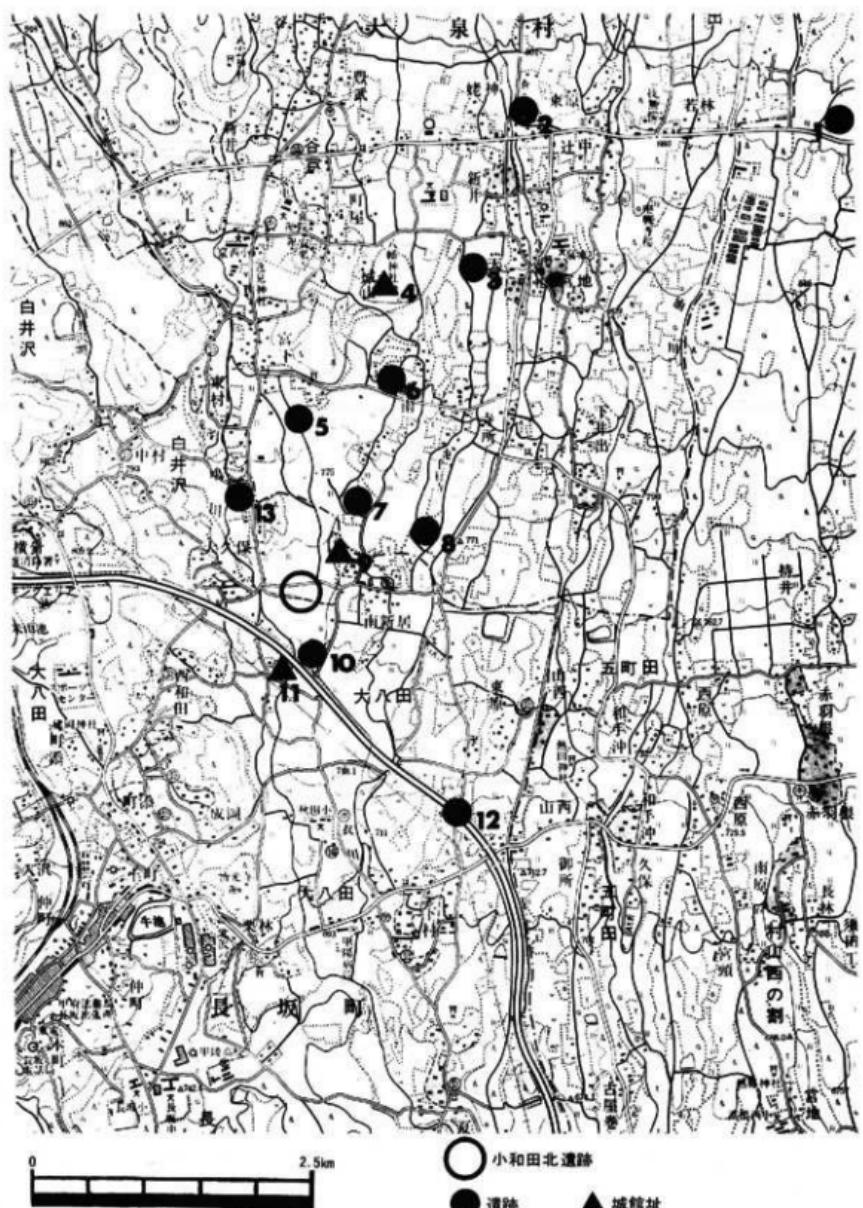
第1表 土坑集成表	61	第3表 金属器集成表	66
第2表 ピット集成表	63		

## 図 版 目 次

1 遺跡全景（西から）	第5図版	1 第8号住居址
2 遺跡全景（北から）		2 第1号掘立柱建物址
3 第1号住居址		3 第1号溝
1 第1号住居址カマド	第6図版	1 第1号集石
2 第3号住居址		2 第4号土坑
3 第3号住居址カマド		3 第4号土坑（完掘）
1 第4号住居址	第7図版	1 第28号土坑
2 第4号住居址カマド		2 第43号土坑
3 第5号住居址		3 第13号土坑
1 第5号住居址銅製品 出土状況	第8図版	1 第44号土坑（東から）
2 同		2 第44号上坑（北から）
3 第7号住居址	第9図版	3 第23～27号土坑
		1 第46～50号上坑
		2 調査以外五輪塔

## 凡 例

- 各遺構の縮尺は堅穴住居址カマドが $1/30$ 、溝が $1/80$ 、それ以外はすべて $1/40$ に統一してある。
- 遺物の縮尺は $1/3$ を原則とするが、石器・古錢等必要に応じて $1/1$ 、 $1/2$ 等を使用する。
- 本書で使用した地図は長坂町発行 $1/25000$ 地形図と $1/1000$ 地籍図である。
- 各遺構の方位はすべて磁北に合わせた。
- 各遺構挿図中に記してある断面基準線は標高で表わした。



第1図 遺跡の位置

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

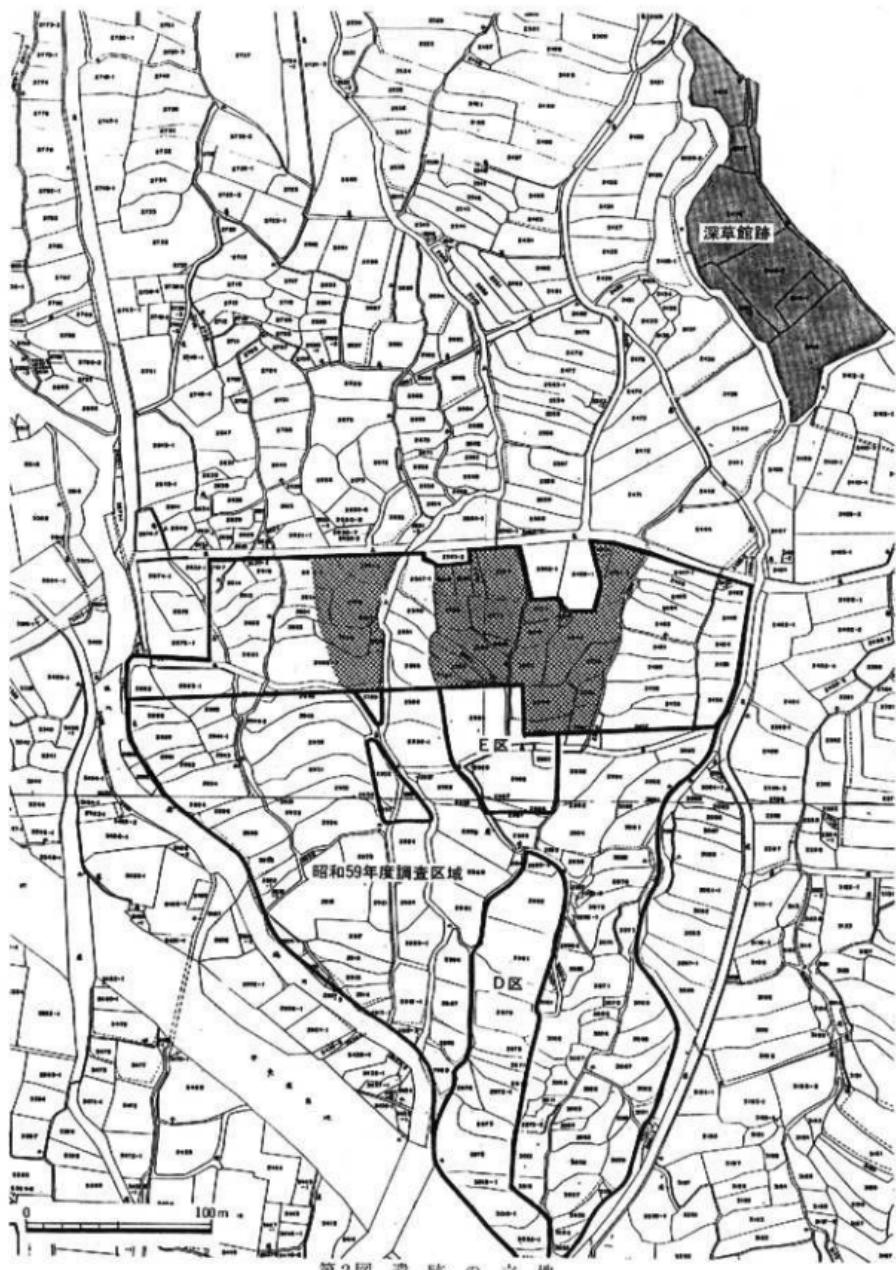
昭和54年度から推進されている圃場整備事業は、水田利用再編対策の推進、作物体系の確立、農地の集積による機械化と省力化等、農業生産基盤の確立をもって農業振興を図ることを目的とするものである。県営圃場整備事業は昭和58年度から実施され、すでに大和田、夏秋地区の16haが完了している。

昭和60年度は大和田地区の36,000m<sup>2</sup>が計画され、昭和59年12月、長坂町教育委員会が現地踏査を実施し、遺跡の有無を検討した。その結果、当該計画地は「深草城址」の外郭に位置し、昭和58・59年度に調査した小和田館跡の同一尾根上にあることなどから、長坂町の中世史解明に重要な地区であると判断し、試掘調査を実施することになった。

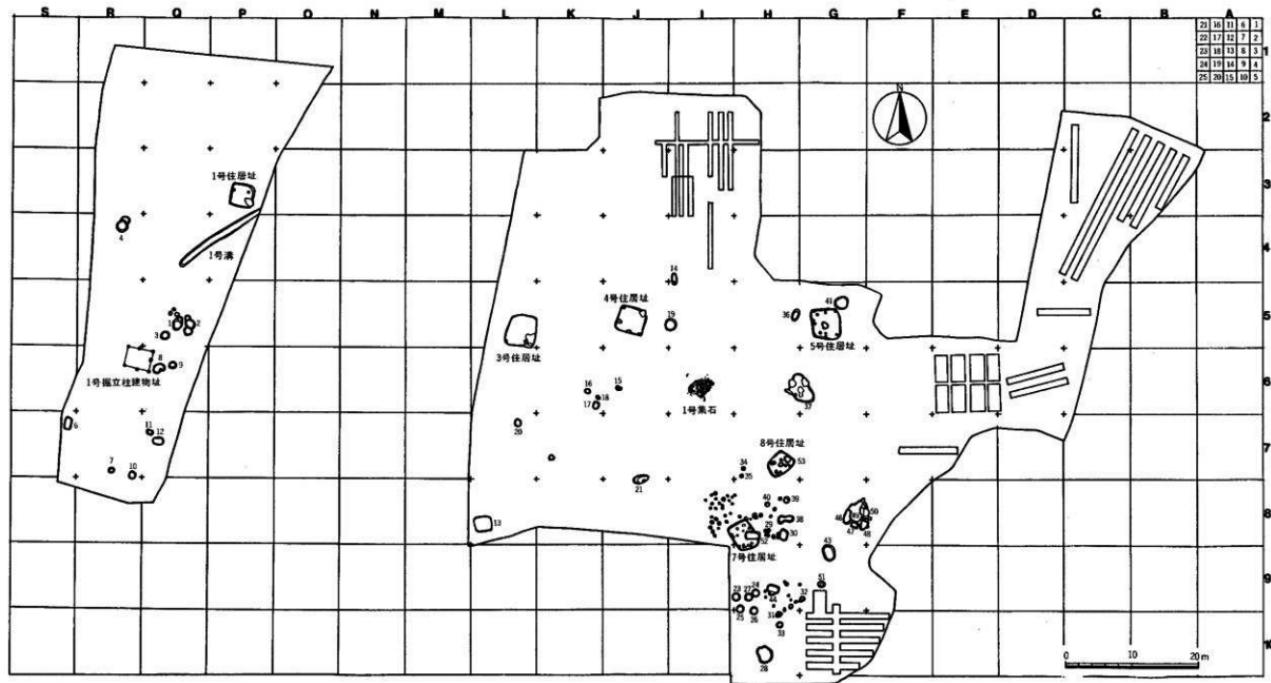
試掘調査は、昭和60年12月長坂町教育委員会が実施した。2m×10mグリット方式によって計画地の全域を調査した。その結果、縄文中期から中世にかけての土器片と、土壤、住居址等多數検出された。結果に基づき山梨県教育庁文化課、駿北土地改良事務所と協議を行い、本調査を実施することになった。調査対象面積は、16,000m<sup>2</sup>、調査主体は町教育委員会があたることとした。

昭和60年1月17日、文化財関係国庫補助事業として県教育委員会へ計画書を提出、昭和60年4月18日交付の内定を受ける。同7月24日文化庁長官に昭和60年度文化財保存事業費補助金交付申請書を提出する。また、昭和60年6月14日駿北土地改良事務所と長坂町との間で、県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の負担協定書を取りかわし、埋蔵文化財発掘調査実施計画書を提出した。

発掘調査は、昭和60年7月1日から着手し、12月10日発掘作業を終了、昭和61年3月31日全ての調査を終了した。



第2図 道 跡 の 立 地



第3図 造構配位図

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

本年度の調査は昨年度調査より引き続いて2本の尾根部分について実施したが、昨年度に行なった試掘調査をもとに遺構の存在を確認し、遺構の存在のみられなかった部分については土捨て場とした。

遺跡中央を流れる用水路より東側尾根をA区、西側尾根をB区とし、重機による表土剥ぎの後、鋤簾による精査を行ない、遺構確認をした。確認面での遺構検出のち、遺構調査を行なうにあたって、磁北線に沿って東西南北を基準とする $10\times10m$ のグリットを調査区全域にかかるように設定し、東から西へA～T、北から南へ1～11という組合せにより各グリットを表示した。さらに各グリットを $2m\times2m$ の、25個の小グリットに分割して遺構調査をすめることした。

調査は圃場整備との関係上、西側のB区より開始した。台風6号の影響で、7月3日より重機による表土剥ぎを開始する。表土剥ぎは地形上、北から南へ下がるようにすすめ、この段階において住居址1軒が検出された。B区表土剥ぎは7月6日に終了し、引き続いてA区の表土剥ぎにうつる。A区の表土剥ぎは西から東へ、やはり北から南へ下がるようにすすめた。A区の表土剥ぎは7月19日に終了した。

7月10日より作業員を投入し、遺構確認を開始する。それと併行してB区にグリットを設定する。遺構確認後、土坑より調査をはじめ、順次住居址、掘立柱建物址を調査する。B区の調査は7月24日に終了し、住居址1軒、掘立柱建物址1棟、溝1条、土坑12基、ピット3基を検出した。

B区終了と前後して7月22日よりA区の調査を開始する。A区遺構確認と併行してグリットを設定し、西から東へと調査をすすめた。B区同様、土坑より掘り始め、住居址へと移る。7月31日に5号住居址北西部床直上にて銅製品の出土をみる。8月13日から15日にかけてお盆休みとしたものの、それ以外は雨天による作業中止もなく、炎天下の中作業は順調にすすみ、9月9日にA区の調査を終了した。A区においては住居址5軒、集石遺構1基、土坑41基、ピット48基を検出した。

また、本調査と併行して調査区域外の地番2562-1に存在する五輪塔についても調査を行ない、実測及び拓影を行なった。

9月10日に器材を撤収する。

11月1日より秋施工に伴い、別当地区の調査を開始し、12月10日に終了する。

なお、本報告書は小和田分に限り、別当分は来年度に報告するものとする。

### 第三章 遺跡の地理的・歴史的環境

長坂町は八ヶ岳南麓、八ヶ岳の雄大かつ緩やかな裾野部に位置している。その上流より湧出した小泉は幾本も流れ出て、裾に向って流合・分岐をくりかえしながら、やがて釜無川や須玉川に注いでいる。こうした小河川は統合されるにしたがってその浸蝕力を増し、そのため長坂町の標高780m付近においては複雑に谷を形成しており、その谷に狹まれた部分は南北に長い尾根となっている。

本遺跡はこうした尾根上に立地しており、東の西衣川、西の鳩川によって狭まれている。長坂町に限らず八ヶ岳南麓ではこうした地形上に立地している遺跡が多い。

さて近年、北巨摩郡において県営圃場整備事業が積極的にすすめられており、それに伴い数多くの貴重な遺跡が調査され、良好な資料が蓄積されてきている。以下、いくつか示してみると（第1図）。

- |          |  |
|----------|--|
| 1 石堂遺跡   | 縄文後・晩期。金生遺跡に匹敵する大規模な配石遺構が検出されており、今後の成果が期待される。  |
| 2 東姥神遺跡  | 平安時代集落。  |
| 3 天神遺跡   | 縄文前・中期・平安時代集落。   |
| 4 谷戸城址   | 中世城館址。   |
| 5 豆生田遺跡  | 縄文後期・平安時代。   |
| 6 城下遺跡   | 平安時代集落。掘立柱建物址が顕著である。   |
| 7 金生遺跡   | 縄文前～晩期・平安時代・中近世。国指定史跡。大規模な配石遺構が検出され注目された。また、B区より検出された中世遺構は深草城址に伴うものと考えられ、從って本遺跡との関連も想定される。 |
| 8 寺所遺跡   | 縄文前・中期・平安時代集落。   |
| 9 深草館跡   | 中世城館址。長坂町指定史跡。   |
| 10 小和田遺跡 | 縄文中期・平安時代・中世。特に中世の資料にみるべきものがある。  |
| 11 小和田館跡 | 中世城館址。   |
| 12 柳坪遺跡  | 縄文中期・平安時代集落。中央道及び長坂インターチェンジ建設に伴い数回にわたって調査され、大規模な集落の様相が把握されている。                             |
| 13 別当遺跡  | 縄文後期集落。  |

本遺跡の位置する八ヶ岳南麓の地は縄文時代以来、非常に重要な位置を占めている。金生遺跡・石堂遺跡・柳坪遺跡に代表されるように縄文時代においては一大集落地帯であり、弥生時代から奈良時代にかけての遺跡・遺物の報告は極めて少ないものの、平安時代以降クローズア

ップされてくる。特に北巨摩の地は柏前牧、真衣野牧、總坂牧という、所謂「三官牧」の置かれた地として古くから注目されている。律令制の崩壊へとつながる公地の私有化は多くの莊園を生み、これは北巨摩においても例外ではなく大八幡莊等が知られている。そして、こうした私有地は官牧にも及び、私牧化した牧はやがて甲斐源氏の基本的な生産基盤となっていく。こうした中で、本遺跡は大八幡莊の中心に位置し、北東には深草館跡が隣接して位置し、また南には小和田館跡が位置し、さらに深草館跡の北約1kmには谷戸城が位置するなど、中世の遺跡遺物が多く、中世史研究の上で極めて重要な位置を占めている。また、先に示した他にも高根町、須玉町、蘿崎市等でも重要な資料が蓄積されており（註）、長坂町のみではなく周辺地域をも含めた巨視的な視野で歴史をみつめる必要性が改めて求められている。

註 例えば高根町湯沢遺跡、須玉町若神子城址、中尾城址、武川村官間田遺跡等が挙げられる。このうち湯沢遺跡は多數の据立柱建物址が検出され、古代における官邸址としての性格が想定され、官間田遺跡は真衣野牧に関連する官街と考えられており、その成果が期待されるところである。若神子城址、中尾城址は甲府と信濃を結ぶ街道上、佐久方面に向う佐久往還と諏訪方面に向う信州往還という、戰略上極めて重要な地点に位置している。このように北巨摩郡下においては単に一地方史の解明のみならず、従って周到な調査・研究が不可欠であるといえる。

## 第IV章 遺構調査

今回、検出された遺構は平安時代の竪穴住居址3軒、中世の竪穴遺構3基、掘立柱建物址1棟、溝1条、集石遺構1基、集石土坑4基、地下式土壤2基、上坑48基、ピット51基である。このうち、中世の竪穴遺構も一応、便宜上住居址として取り扱うものとする。

各遺構を取り上げる前に、本遺跡における層序を概述しておく。水田に伴う天土と床土は約30~40cmの厚さで認められ、その下に厚さ15~20cmの黒色土となり、ローム層に至っている。今回、埋没谷と判断した地点では、この黒色土が3~4mの厚さで堆積しており、巨石を伴う礫層へと達している。

### 第1節 住居址

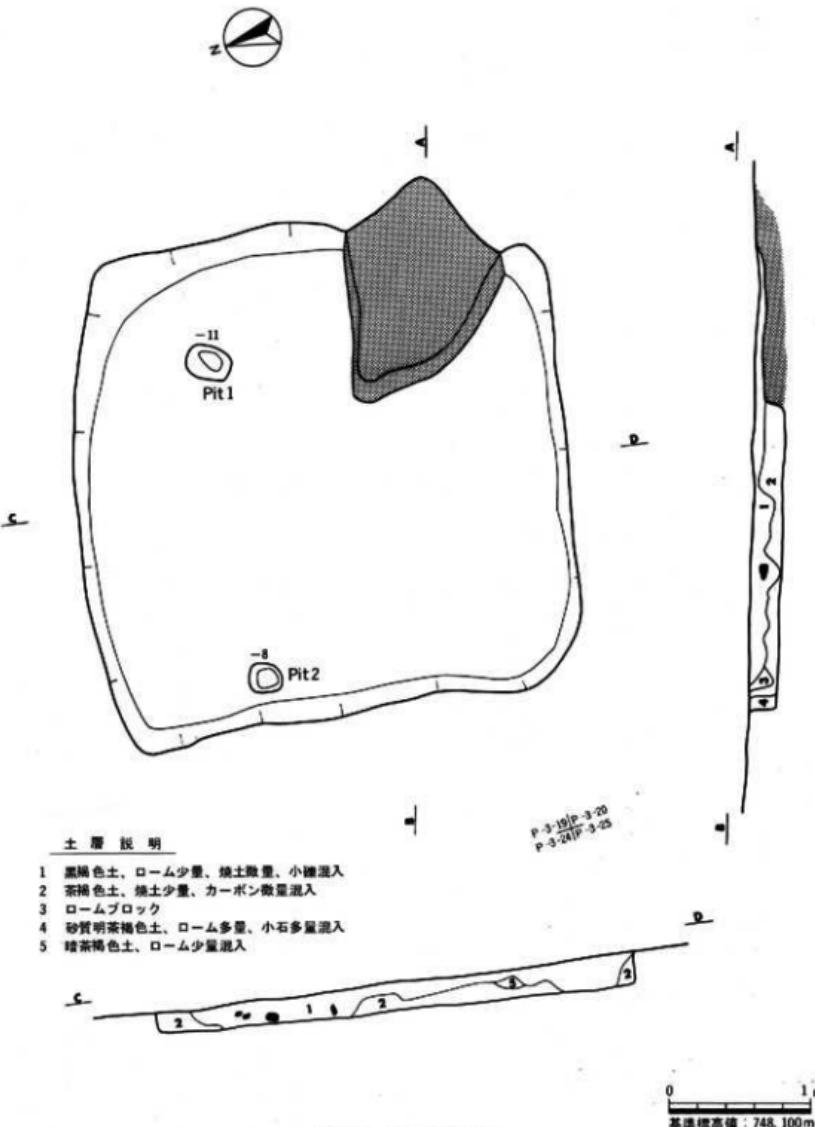
住居址はA区にて5基、B区にて1基の計6基が検出されている。第2・6号住居址は欠番とする。

#### 第1号住居址（第4・5図）

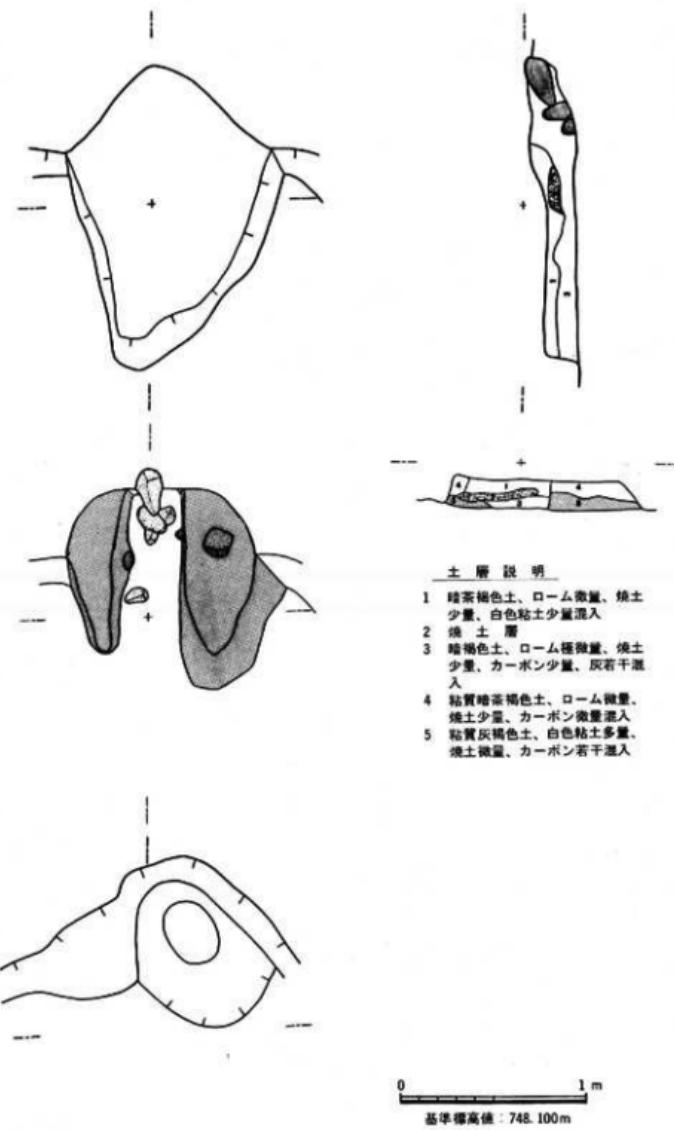
第1号住居址はB区北側、P—3グリットの南側、第1号溝の北辺に位置する。主軸を北113度東に採り、壁長は東西南北それぞれ3.09m、3.02m、2.89m、3.43mを測る。東壁南寄りにカマドを有し、その平面プランは隅丸の方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は12~22cmを測る。覆土は黒褐色土、褐色土の2層を主体とする。床面はほぼ平坦であり、床面上北東部にて32×22cmの平面梢円形を呈し、深さ11cmを測るピット、南西壁際にて径23×21cmの平面円形を呈し、深さ9cmを測るピットの計2基を検出した。この2基のピットはその形状、規模よりして柱穴として差し支えないと思われる。なお、周溝その他の付帯施設は検出されなかった。

カマドは壁外に24cm程張り出して構築されているもので、遺存状態は良好とはいはず、両ソデについても基底部近くのみの遺存であった。両ソデ部は住居址構築基盤層に近似する灰褐色粘土によって構築されており、左右ソデ部はそれぞれ幅37cm、59cm、長さ88cm、105cmを測る。燃焼部は両ソデ部にかこまれた30×95cmの範囲で確認され、ほぼ平坦にて煙道部に継続する。火床面は不鮮明であり、煙道部は20度ほどの傾斜にて壁外に向って立ち上がり、煙出し部に至るものである。煙道部分に径20~50cm大の礫が数個検出されており、また掘り方は166×128cmの範囲にて、床面よりの深さ10cmを測る。

遺物はそれほど多くはなく、住居址中央よりカマド付近に集中して出土しており、実測・図示し得たものは土師器壺1、同甕2、同壺1、内耳土器1の5点で、このうち、土師器壺(1)



第4図 第1号住居址



第5図 第1号住居址カマド

は住居址北東部中央寄りの床面上にて、甕と蓋の3点はカマド内にて出土した。また、内耳土器(5)は北東隅の覆土最上層より出土しており、直接住居址に伴うものではない。カマド内にて検出された礫は支脚とは考えられず、カマド構築時の補強材と考えられる。

### 第3号住居址(第6・7図)

第3号住居址はA区西側のL-5グリット南東部に位置する。主軸を北110度東に採り、壁長は東西南北それぞれ4.48m、3.91m、4.17m、3.81mを測る。東壁南寄りにカマドを有し、平面プランは歪んだ方形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、緩やかなスロープ上に住居址が立地しているため、北壁高が55cmと深く、南壁高が16cmと浅い。その南壁高の遺存状態は極めて悪い。覆土は黒褐色土、褐色土、茶褐色土の3層を主体としている。床面は平坦であり、床面上南西隅にて径48×31cmの平面円形を呈し、深さ6cmを測るビット、南東カマド脇に径57×51cmの平面円形を呈し、深さ5cmを測るビットの計2基が検出された。いずれも柱穴と判断され得るものである。また、周溝その他の付帯施設は検出されなかった。

カマドは南東隅の東壁部に壁外にほとんど張り出さずして構築されており、遺存状態は不良で、両ソデ部についても基底部のみの遺存であった。両ソデ部は住居構築基盤層に近い褐色粘土をもって構築されており、補強材として径30cm大の礫を使用している。残存するソデ部は左ソデ部が幅85cm、長さ70cm、右ソデ部が幅80cm、長さ94cmをそれぞれ測る。燃焼部は両ソデに囲まれた110×85cmの範囲で確認され、平坦にて煙道部に至っている。火床面は63×47cmの範囲で明確に認められた。煙道部は燃焼部とほとんど一体であり、明確にし得ない。掘り方は180×80cmの範囲内にて床面よりの深さ20cmを測る。カマド内より支脚等は検出されなかった。

遺物は住居址全体に分布しているが、量的にはさほど多くなく、実測・図示し得たものは土師器壺3、蓋1、須恵器甕3の計7点で、(1)～(3)はカマド内にて、残りは覆土下層より出土している。

### 第4号住居址(第8・9図)

第4号住居址はJ-5グリットほぼ中央に位置している。主軸を北12度東に採り、壁長は東西南北それぞれ3.98m、4.10m、4.23m、3.68mを測り、平面プランは方形を呈する。カマドは本遺跡唯一北壁東寄りに有している。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は29～41cmを測る。覆土は茶褐色土、黒褐色土、及び褐色土の3層を主体とする。床面は平坦で、ビットは4基検出されている。住居址北西隅のものは径30×25cm、深さ16cm、平面円形を呈する。西壁際中央南寄りに位置するものは径62×90cm、深さ32cm、平面方形を呈する。南壁際中央に位置するビットは径54×120cm、深さ37cm、平面梢円形を呈し、ビット中央に50×30cm大の礫を含む。南東

隅の1基は径35×62cm、深さ26cm、平面円形を呈する。このうち、北西隅、南東隅の2基は柱穴と判断されるが、他の2基については柱穴というよりむしろ別の機能を有するものと考えられる。また、周溝その他の付帯施設は検出されなかった。

カマドは本遺跡唯一の北カマドであるが、遺存状態は極めて悪く、天井部及び左ソデは失われており、右ソデの補強に使用されたと思われる礎を残すのみである。燃焼部は右ソデ部と左ソデ部の存在が想定される82×58cmの範囲で比較的明瞭に認められ、平坦にて煙道部に至ると思われるが、燃焼部と一体であり、明確にし得えない。火床面は55×44cmの範囲内で明確に認められるが掘り方は不明瞭である。

遺物の量は多くなく、土師器、灰釉陶器等出土しているが、いずれも小片であり、実測・図示し得る程のものは出土していない。なお、覆土第2層の黒褐色土中より多量の炭化材が出土している。

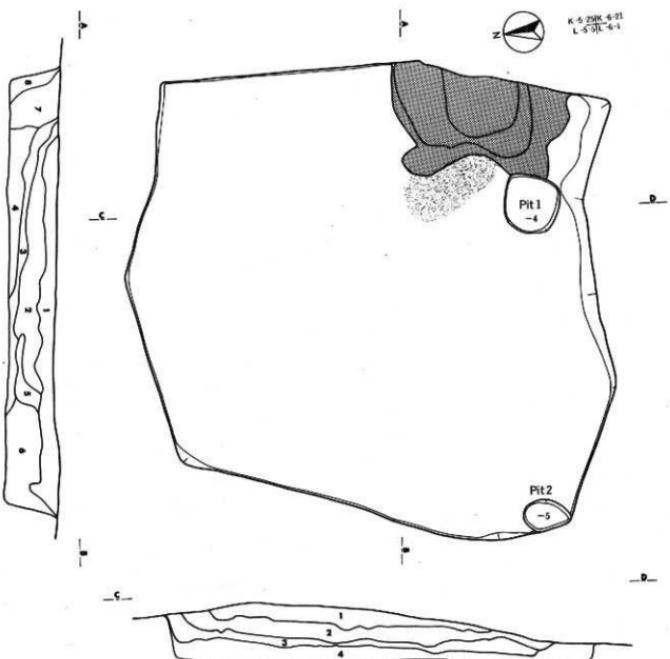
#### 第5号住居址（第10図）

第5・7・8号住居址の3基は中世の所産と考えられ、住居址とは判断し難いものであり、竪穴遺構とすべきものであるが、ここでは一応、住居址としてのナンバーを付し、ここにおいて報告することとする。

第5号住居址はG—5グリットほぼ中央に位置し、主軸を北2度東に採る。棟長は東西南北それぞれ4.46m、3.99m、3.75m、3.96mを測り、方形プランを呈する。壁高は16~29cmを測り、床面はほぼ平坦であるが、径1m大の巨石が入り込んでいる。こうした例は特に小和田遺跡D地区において顕著にみられ、同じ尾根に立地する遺跡として興味を引くものである。ピットは13基検出された。これらのピットは巨石の存在する南東隅を除く三隅と、東西南北各壁際中央、そして遺構中央の計8基を中心として遺構内に分散している。このうち中央に位置するものは径126×112cm、深さ15cmを測るもので、残る12基は概ね径20~30cm、深さ15~30cm大を主体とする。小和田遺跡の中世竪穴遺構に顕著に認められた炭化物の堆積はみられず、これは本遺跡における第7・8号住居址においてもいえることであり、小和田遺跡の中世竪穴遺構と比較・検討するうえで、一つの注目される差違である(註)。

遺物は本住居址の性格付けするのみならず、本遺跡そのものの性格付けをするのに不可欠であろう、貴重な資料が出土している。この遺物は銅製碗蓋で、北西部床直上より、上を向いた形で出土している。この他には覆土中より聖宋元宝が出土しているが、それ以外の遺物は土器小片が数点出土しているのみで、実測・図示し得るほどの遺物はない。

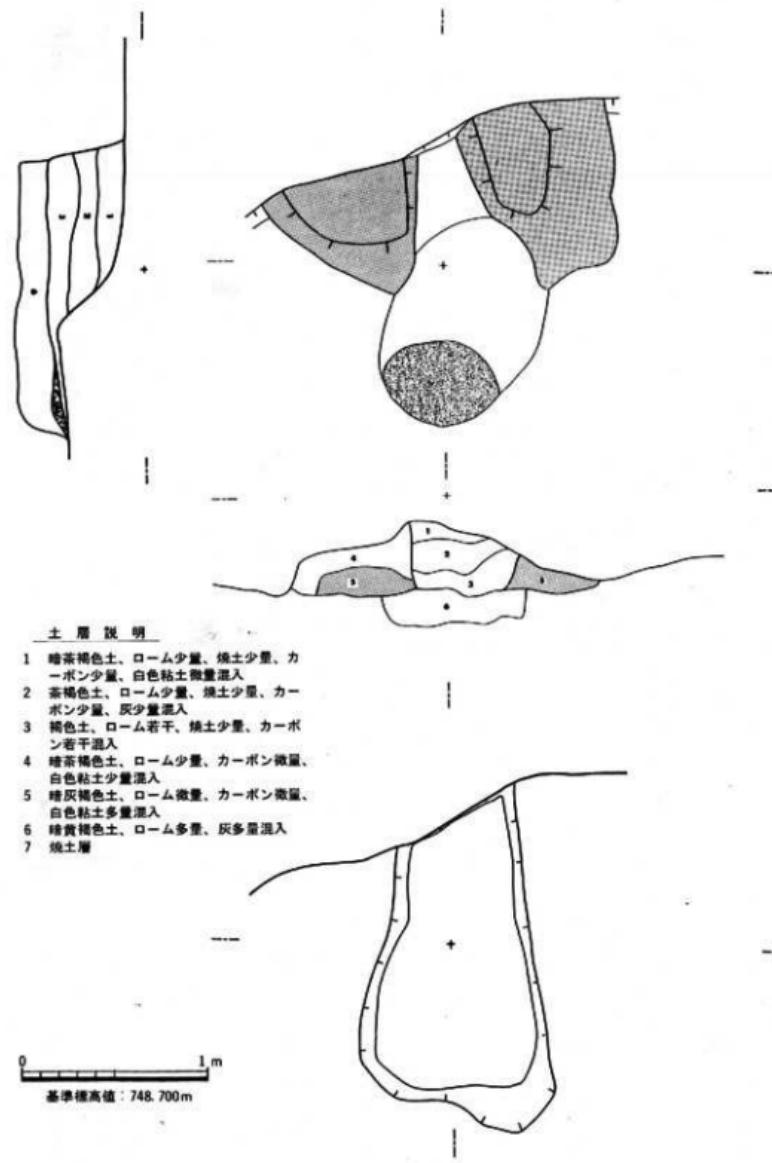
註 小和田遺跡については現在整理中であり、現時点においては『小和田遺跡発掘調査報告』として発表されている。



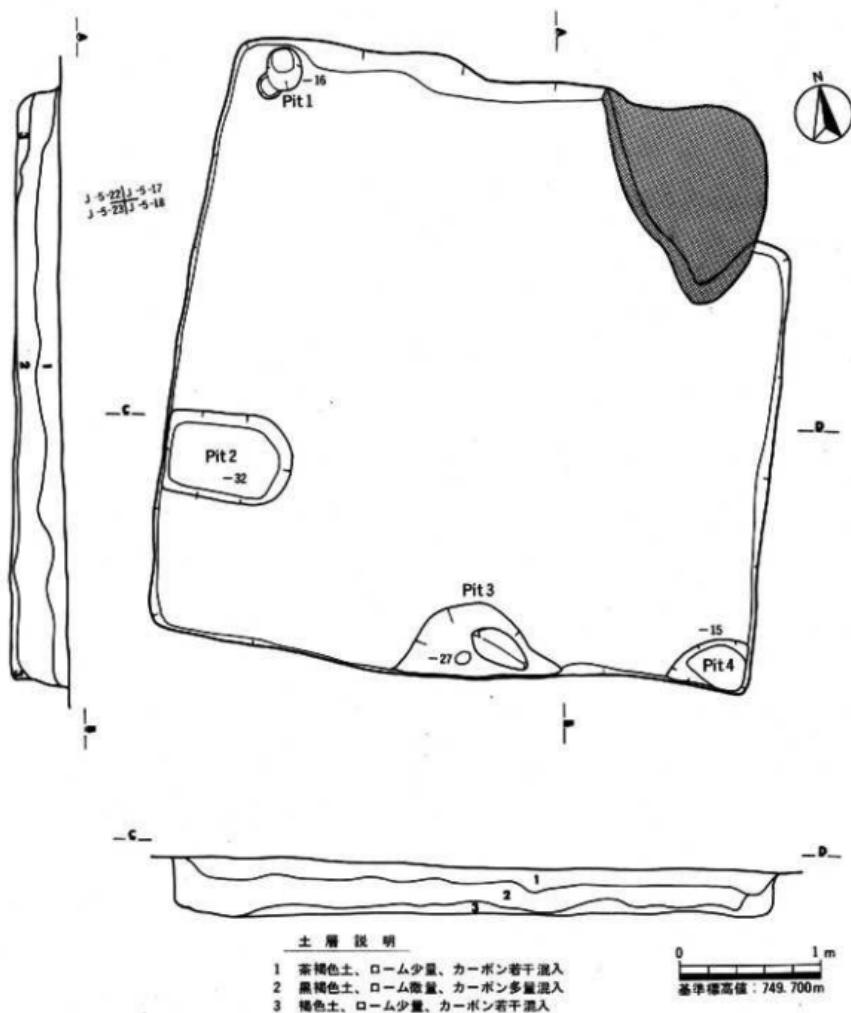
土層説明

- 1 黒褐色土、ローム少量、堆土若干、カーボン微量混入
- 2 緑褐色土、ローム多量、カーボン少量混入
- 3 茶褐色土、ローム多量、堆土若干、カーボン微量混入
- 4 黄褐色土、ローム若干、堆土少量、カーボン微量混入
- 5 棕色土、ローム少量、堆土少量、カーボン微量混入
- 6 粉質綠茶褐色土、ローム多量、堆土微量、カーボン微量混入
- 7 明褐色土、ローム多量、堆土微量、カーボン微量混入
- 8 茶褐色土、ローム少量、堆土微量、カーボン微量混入

第6図 第3号住居址



第7図 第3号住居址カマド



第8図 第4号住居址

### 第7号住居址

(第11図)

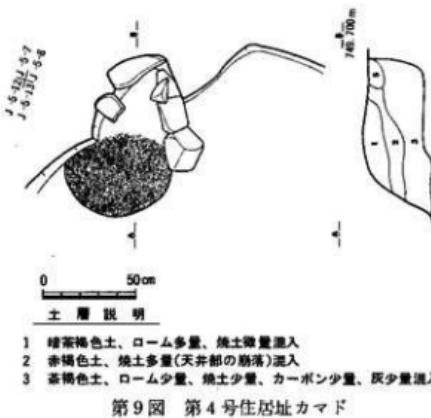
第7号住居址はH-8グリット南西部に位置し、主軸を北26度西に探る。平面プランは長方形を呈し、東壁中央は第52号土坑により切られている。壁長は東西南北それぞれ3.97m、3.58m、3.08m、3.12mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり壁高は17~22cmを測る。床面は平坦であり、ピットは14基検出されている。平均して径20~30cm、深さ10~30cm大のものが主体をなすが、第5号住のよう明確な規則性をもたず、遺構内に分散しているが、そうした中でも南東隅を除く三隅のものはその形状・規模よりして柱穴と考えられる。周溝等の付帯施設は認められない。

遺物は覆土中より嘉祐元宝が出土しており、またピット8より石鉗が1点、覆土中より青磁片が出土している他は実測・図示し得るもの出土はない。

### 第8号住居址 (第12図)

第8号住居址はH-7グリット南東部に位置し、主軸を北47度東に探る。北壁を53号土坑により切られている。壁長は東西南北それぞれ2.57m、2.30m、3.66m、2.78mを測り、台形ぎみの方形プランを呈する。壁はほとんど垂直であり、壁高は35~42cmを測る。床面は平坦であり、ピットは10基検出されている。これらのピットも第7号住居址同様、第5号住居址のような明確な規則性はもない。その中でピット1、2、3、6、7の5基はまるで土坑の如き様相を呈し、第5・7号住居址におけるピットとは区別されるべきかもしれないが、概ね径20~50cm、深さ30~50cm大のものである。

遺物はほとんどが小片であり、実測・図示し得たものはわずかに刀子1本である。図示していないが、内耳土器片の出土もみられる。



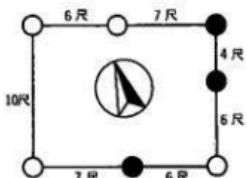
第9図 第4号住居址カマド

## 第2節 挖立柱建物址

掘立柱建物址はB区にて1棟検出されており、A区においては検出されなかった。

### 第1号掘立柱建物址（第13図）

第1号掘立柱建物址はB区中央、Q・R—6グリット北側に位置し、主軸を北100度西に採る



模式図

東西棟の建物である。2間×2間で梁行3.88m（13尺）、桁行3.00m（10尺）の長方形を呈する。柱穴は7基検出され、西側部のみ1間である。柱間は梁行間が1.73m（6尺）～2.15m（7尺）、桁行間が1.15m（4尺）～1.85m（6尺）である。南北の柱間を比較すると北側が東より7尺—6尺の間隔であるのに対し、南側は東より6尺—7尺と点対称の位置にあり、また東側柱間も4尺—6尺と北に片寄っており、柱穴は検出されなかつた

ものの3間×3間であったとも考えられる。

掘り方は7基のうち3基に柱痕が認められる。覆土はピット1、2、3がローム少量、カーボン微量混入暗褐色土であり、ピット4～7では下層部に粘質暗茶褐色土が含まれている。

遺物の出土はみられなかった。

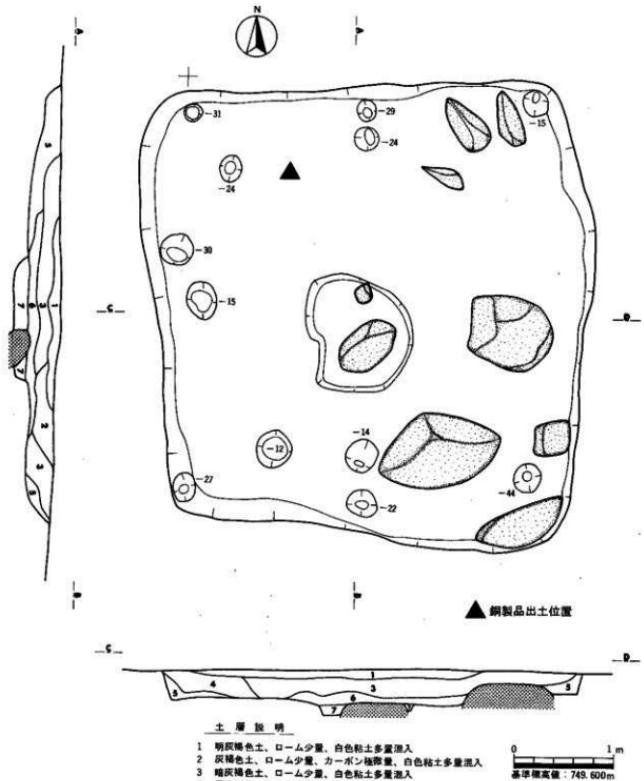
## 第3節 溝

溝はB区にて1条検出されているのみで、A区においては検出されていない。

### 第1号溝（第14図）

本溝はB区北側、第1号住居址の南2m、P—4グリットからQ—4グリットにかけて南西から北東に向って走るもので、A区とB区との間の南北に流れる小川に注いでいる。長さ14mを測り、幅は最小75cm、最大116cm、深さ40～60cmをそれぞれ測る。溝壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面台形を呈し、底面はなだらかである。覆土はカーボンを混入する粘質褐色土、茶褐色土の2層を主体としている。

出土遺物は天慶元宝が2枚重なって出土した他は中世陶器片、砥石剝片等があるが、古錢を

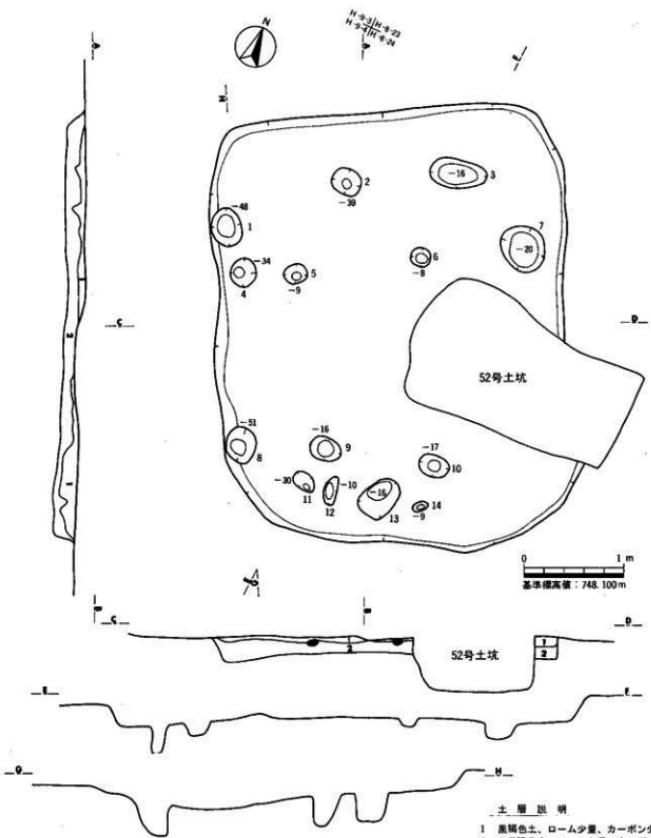


土層解説

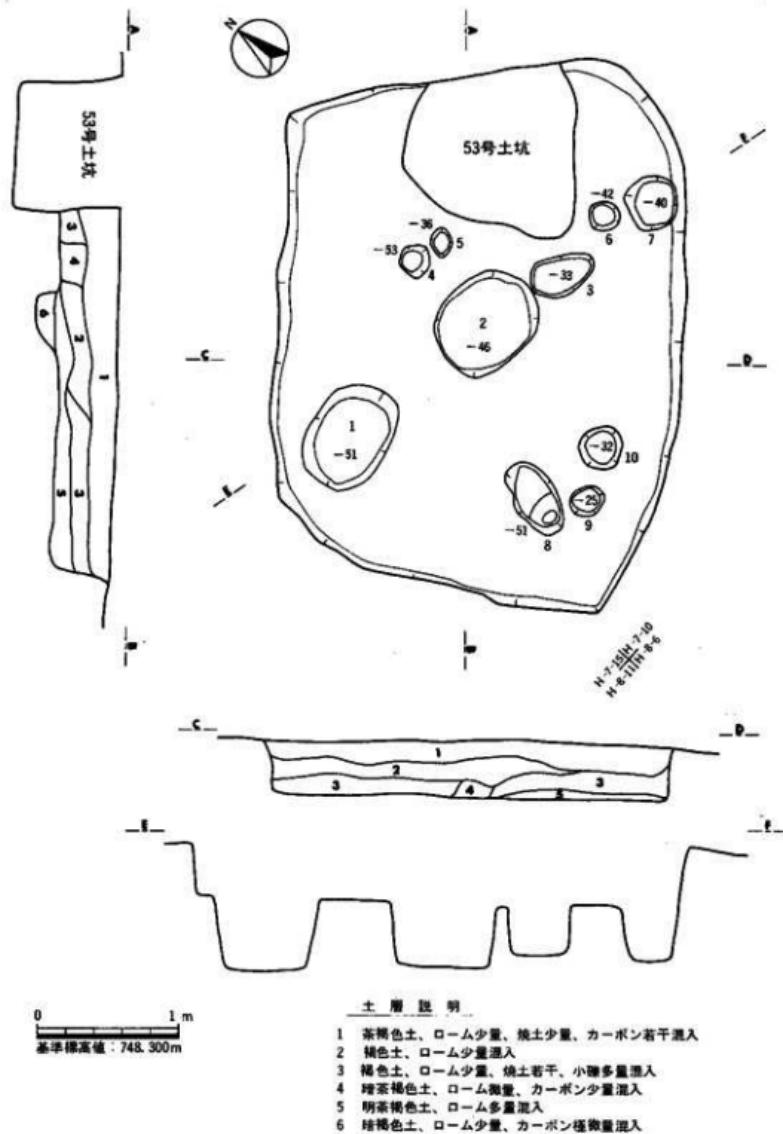
- 1 暗褐色土、ローム少量、白色粘土多量混入
- 2 反緋色土、ローム少量、カーボン微量混入
- 3 暗灰褐色土、ローム少量、白色粘土多量混入
- 4 反緋色土、ローム少量、白色粘土多量混入
- 5 反緋色土、ローム少量、カーボン微量混入
- 6 黄褐色土、ローム微量、カーボン微量混入
- 7 暗褐色土、ローム少量、カーボン多量混入

0 1m  
基準標高値 : 749.600m

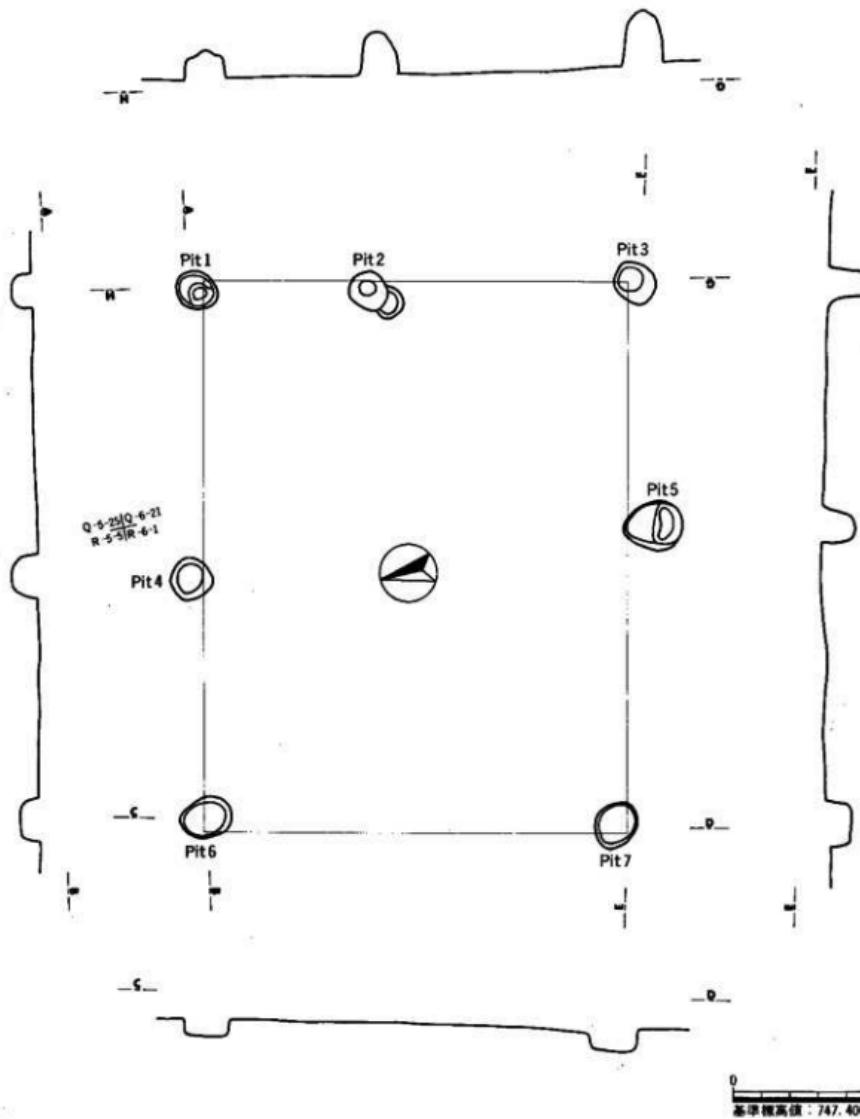
第10図 第5号住居址



第11図 第7号住居址



第12図 第8号住居址



第13図 第1号掘立柱建物址

除き、いずれも小片で  
あり、実測・図示し得  
るほどのものはなかっ  
た。

#### 第4節

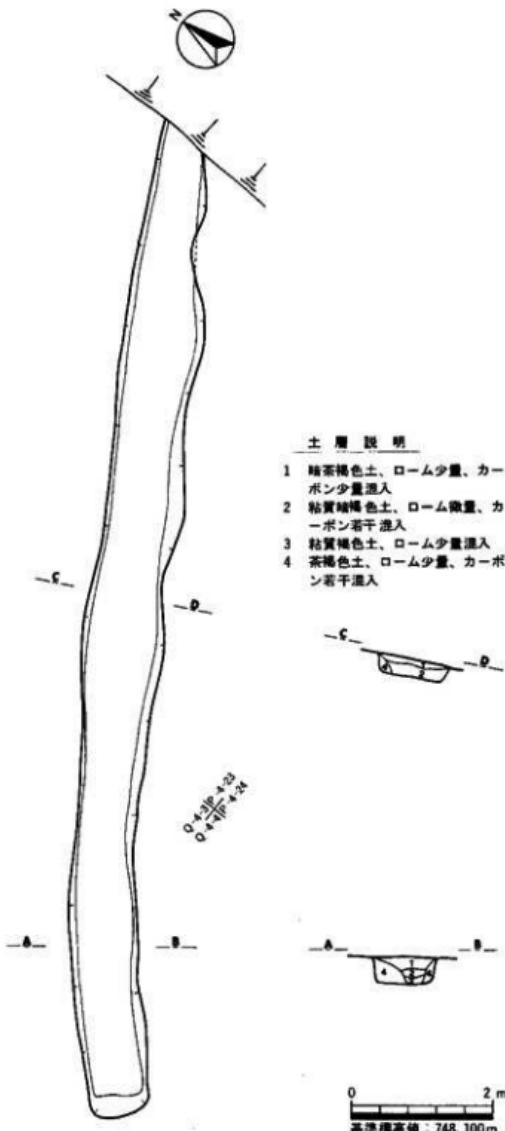
##### 集石遺構

ここでいう集石遺構  
とは、中世の集石と集  
石土坑をいう。中世集  
石はA区にて1基検出  
され、集石土坑はB区  
にて1基、A区にて3  
基が検出されている。

##### 第1号集石

(第15図)

第1号集石はI-6  
グリット南西部に位置  
し、径3~30cmの大の砾  
をもって4.5m×3.2m<sup>2</sup>  
の範囲をもつものであ  
る。石は深さ20cm程の  
掘り込み内に置かれて  
いる。掘り込みは亞ん  
だ橢円形を呈し、底面  
は径1m大の巨石が顔  
を出してている。覆土は  
茶褐色土を主体とし、  
カーボンが若干混入し  
ている。出土遺物は本



遺跡内においては比較的豊富で、かわらけ、内耳土器、陶器、石臼、五輪塔が出土しており、このうち実測・図示し得たものはかわらけ4個体、石臼2個、石擂鉢2個、五輪塔空輪部及び風輪部2体、五輪塔水輪部1体の計11点である。この中で五輪塔が出土していることは注目すべき事象であり、本造構の性格を知るうえで看過できないものである。

#### 第4号土坑（第16図）

第4号土坑はB区西側、R—4グリットの東側に位置する。径 $1.5m \times 1.7m$ の平面円形を呈し、掘り込みはテラスをもち、深さ52cmを測る。土坑内全体に径30~40cm大の礫を配するが、礫の配置に特に規則性はみられない。覆土は黒色土を主体とする。出土した遺物は内耳土器片数点であり、実測・図示し得る程のものはない。

#### 第28号土坑（第17図）

第28号土坑はA区南端、H—10グリット南側に位置する。径 $2.53m \times 2.94m$ の平面不整円形を呈し、壁はほぼ垂直である。礫は20~40cm大のものを土坑南東壁際を中心に配されており、特に壁際においては規則正しく並んでいる。掘り込みの深さは35cmを測る。覆土はカーボンを含む暗褐色土である。遺物の出土はみられなかった。

#### 第43号土坑（第18図）

第43号土坑はA区東側南寄り、G—9グリット北側ほぼ中央に位置し、径 $2.40m \times 3.26m$ の平面梢円形を呈するもので、掘り込みの深さは42cmを測る。土坑内に径10~70cm大の礫が配されており、覆土は上層が褐色土、下層が暗茶褐色土でいずれも若干量のカーボンを混入する。出土遺物は馬齒、古錢（聖宋元宝）1枚が出土している。

#### 第51号土坑（第19図）

第51号土坑はA区南側、G—9グリット中央やや南西寄りに位置する。径 $96cm \times 103cm$ の平面円形を呈し、周間に径15~30cm大の礫を配するもので、掘り込みの深さは15cmと他の集石土坑と比較するとはるかに浅いものである。遺物の出土はみられなかった。



第15図 第1号集石

## 第5節 地下式土壙

本遺跡より地下式土壙はA区南側より2基が検出されている。これは小和田館跡において検出されたものと比べると少ないとされる。以下、各土壙について記述してみる。

第13号土坑(第20図)

第13号土坑はA区南西隅のL-8グリット南西隅に位置する。平面プランは一辺2.36m×2.57mのほぼ正方形を呈し、深さ91cmを測る。覆土は5層より成り、粘質の土層である。天井部は崩落しているが、セクションの上からは確認されなかった。

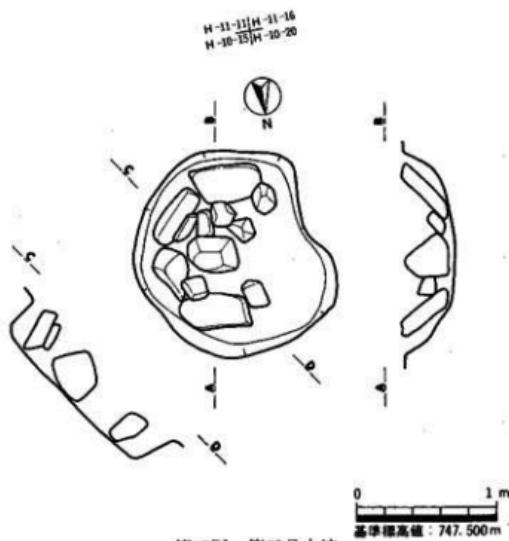
一般の地下式土壙にみられるような円形プランを呈する入口部は付属していない。従って主軸方向は定かではないが、仮に短辺方向をとつてみると北1度西となる。出土遺物は土器片、須恵器片、中世陶器片がみられるが、いずれも覆土中よりのものであり、直接本遺構に伴うものではないと考えられる。

第44号土坑(第20図)

第44号土坑はA区南側、H-9グリット中央やや南寄りに位置する。玄室と入口部は明確に

区別される。玄室部は110cm×186cmの角のとれた方形プランを呈し、深さは80cmを測る。入口部は径90cm×90cmの半円形を呈している。天井部は崩落しているが、セクションより崩落土は確認されない。主軸は北9度東に採る。床面は平坦であり、入口部とはわずかながら段差を有する。

出土遺物はほとんどなく、覆土中より土器片が若干出土しているのみである。



第17図 第28号土坑

## 第6節 土 坑

本遺跡においては、A区にて34基、B区にて10基の計44基の土坑が検出されている。計測値等は表1にまとめて記してあるので、ここではそのうち注目される土坑について述べてみたい。

### 第6号土坑（第22図）

本遺構はその形状・規模より他の土坑とは異なる性格が想定されるもので、むしろ地下式壇に近いものかもしれない。陶器片が数点出土しているが、実測・図示し得るほどのものはない。

### 第23～27号土坑（第25図）

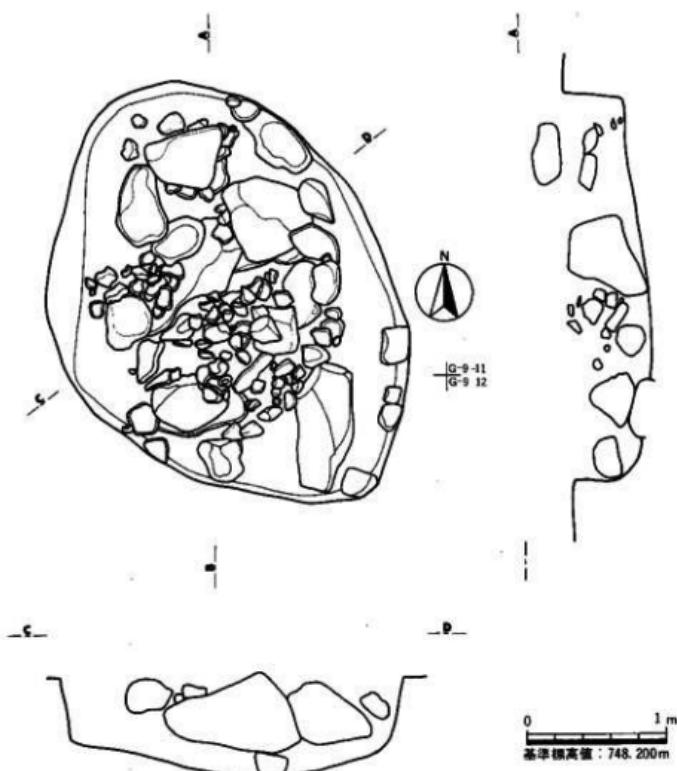
この5基の土坑はその形状・規模が類似するもので、27号を除き覆土も共通しており、注目される一群である。しかし、遺物の出土ではなく、またその配置にも規則性はみられない。

### 第37号土坑（第27図）

おそらく複数の土坑が切り合って存在したものかもしれない。土坑内には巨石が入り込んでいる。青磁片、古銭2（熙寧元宝、他の1枚は不明）、陶器片が出土しており、注目される。

### 第46～50号土坑（第29図）

G-8グリットに位置する土坑群で、49号が他に先行するものと考えられる。46号より古銭



第18図 第43号土坑

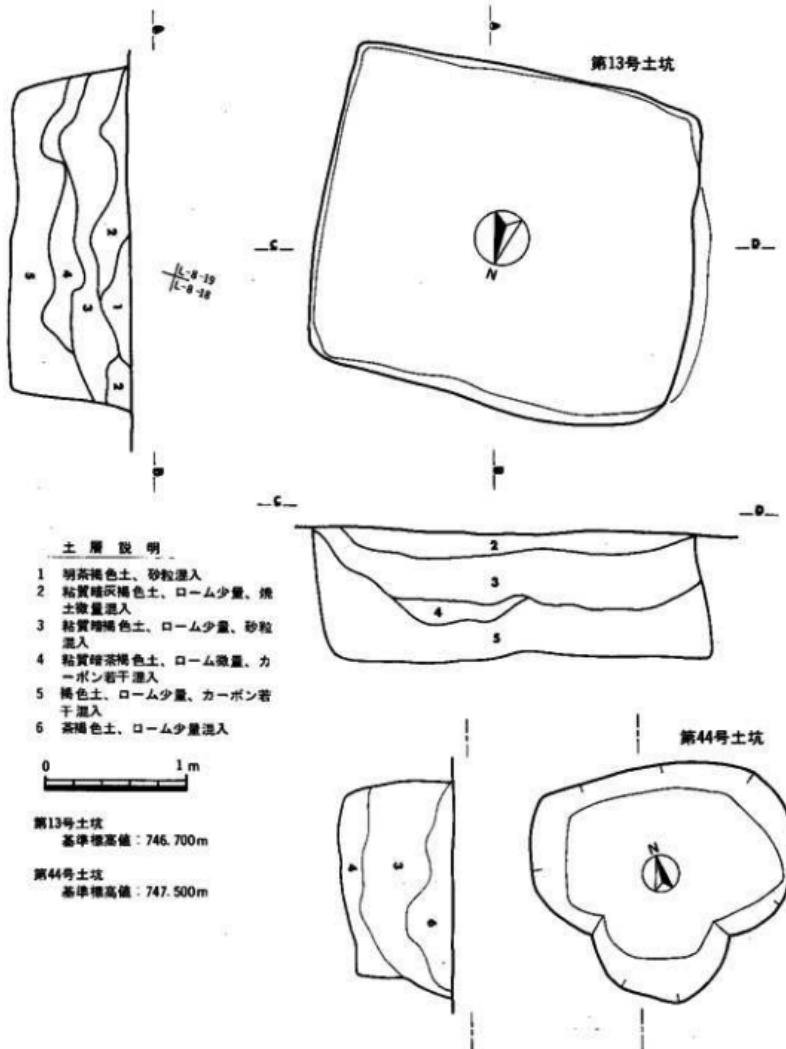
が出土している。

#### 第7節 ピット群

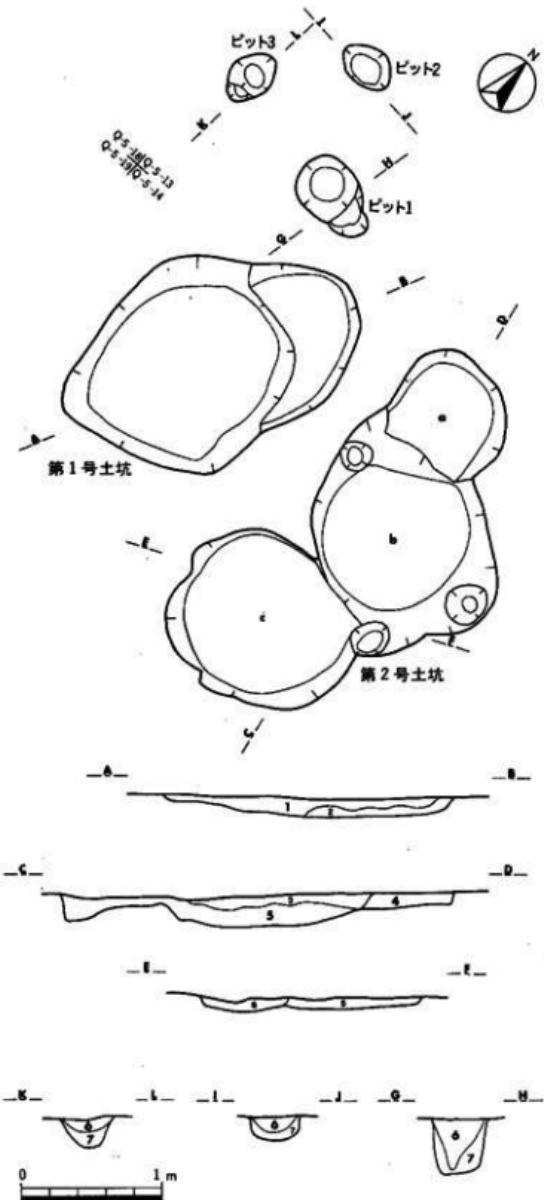
ピットはH-8・9、I-8、Q-5グリッドにおいて51基を検出した。各ピットの計測値は別表の通りである。確認時において明確なる規則性を見出せず、個別に調査を行なった。全体で土器片数点が出土したのみで、その所産時期・性格を明確にする程の遺物の出土はみられなかった。



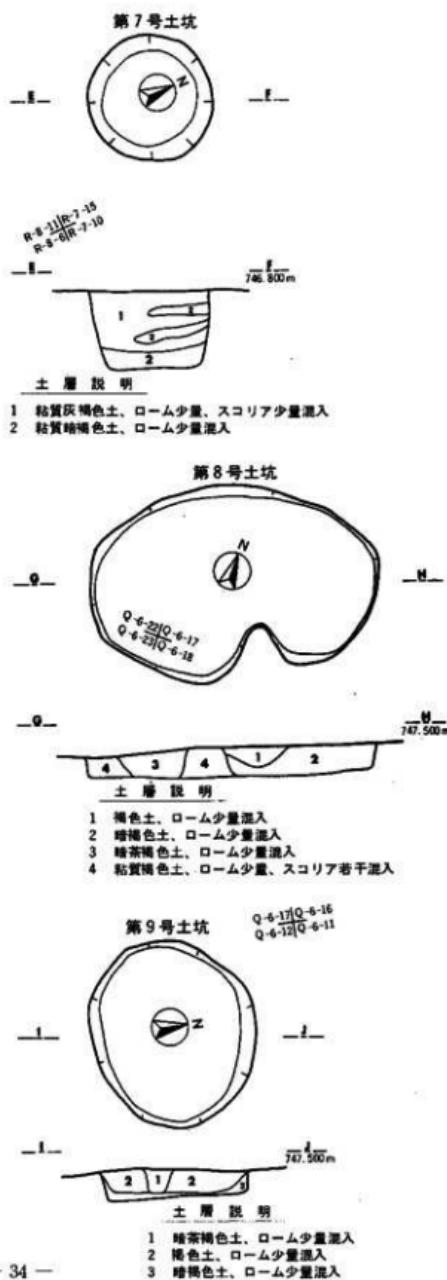
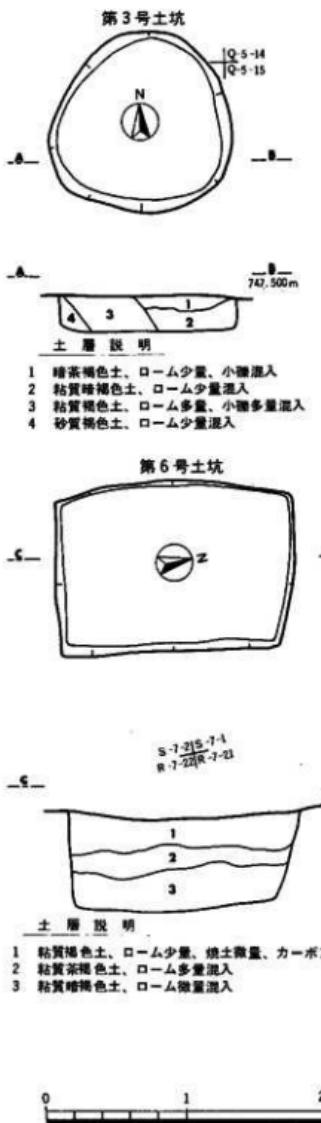
第19図 第51号土坑



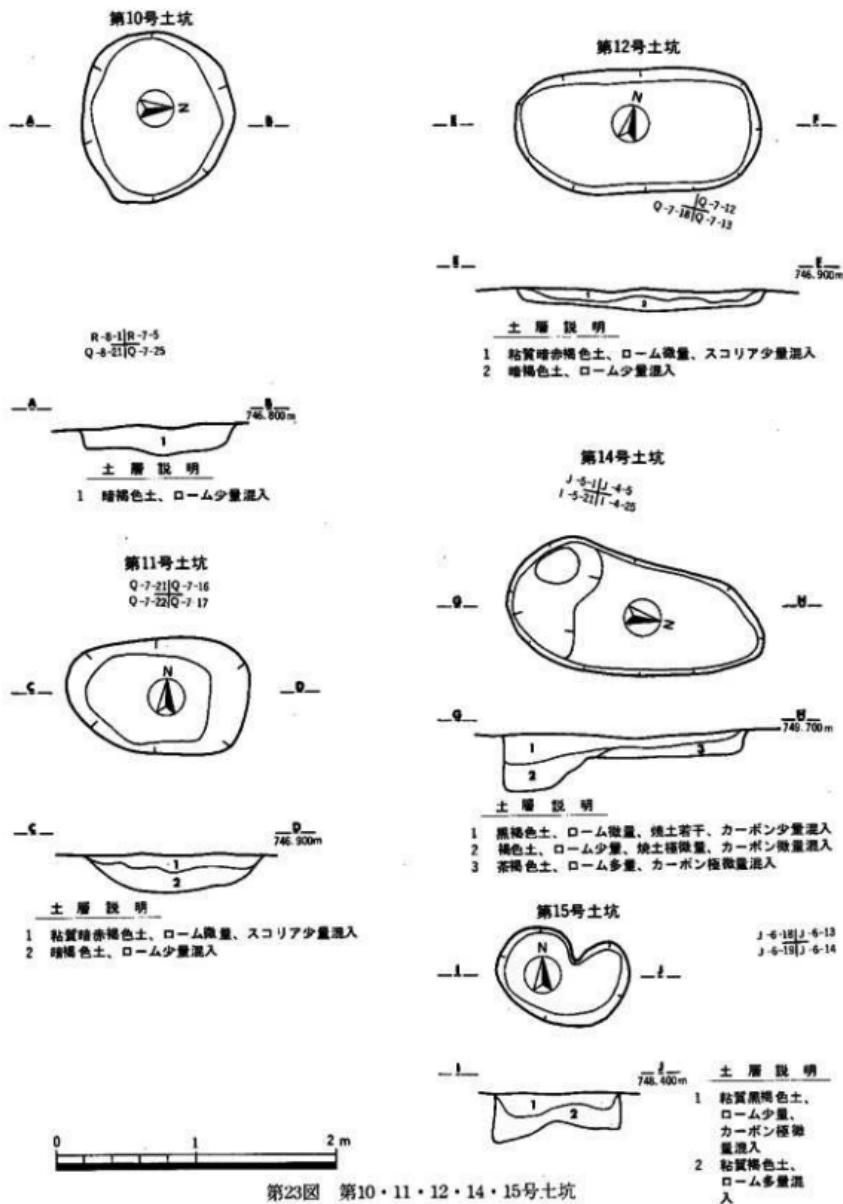
第20図 第13・44号土坑

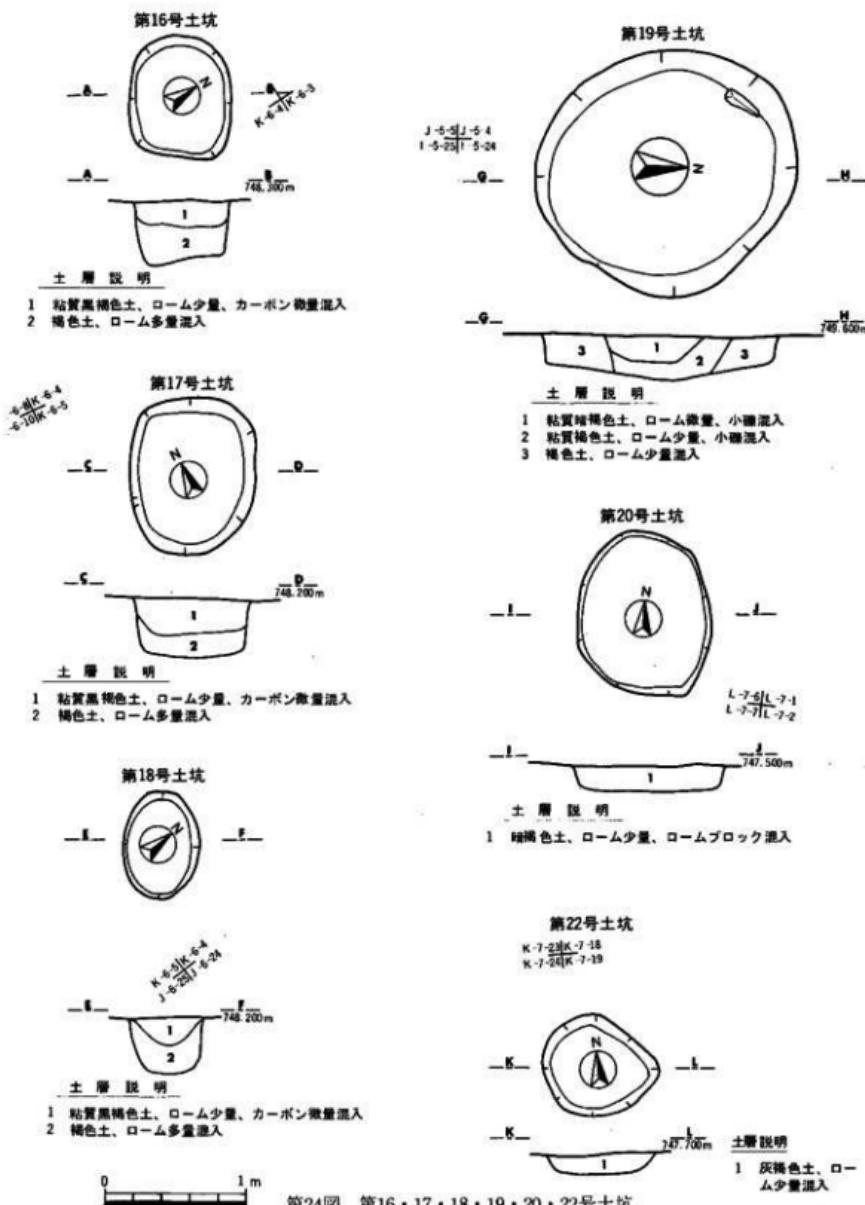


第21図 第1・2号土坑 ピット1・2・3



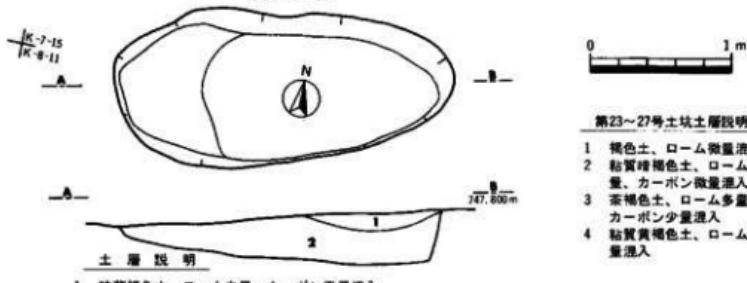
第22図 第3・6・7・8・9号土坑



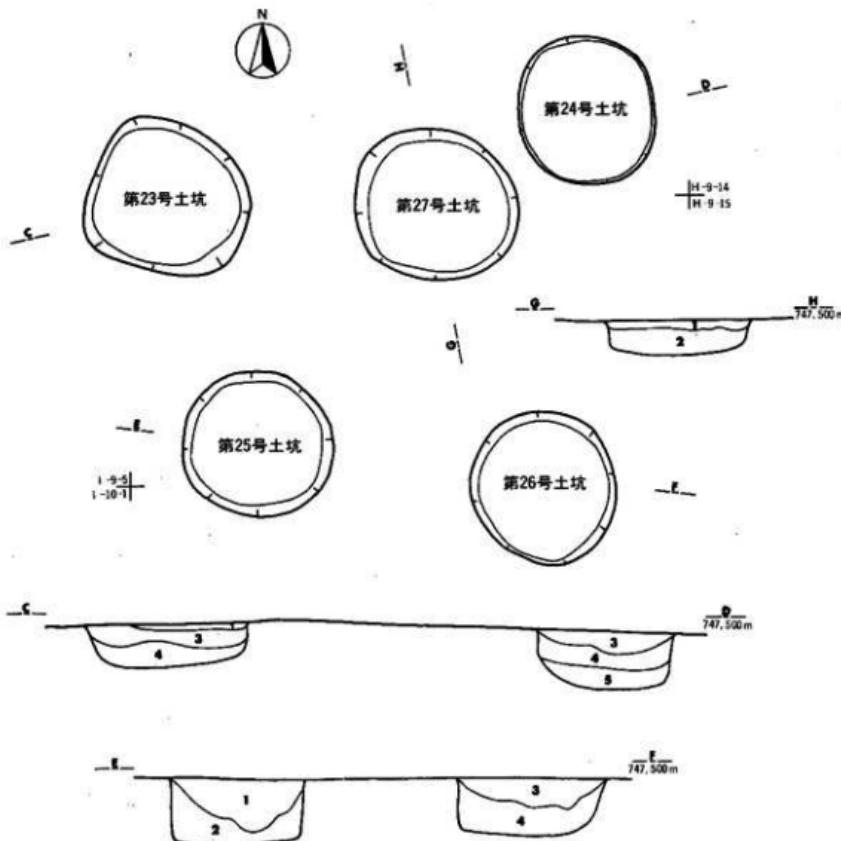


第24図 第16・17・18・19・20・22号土坑

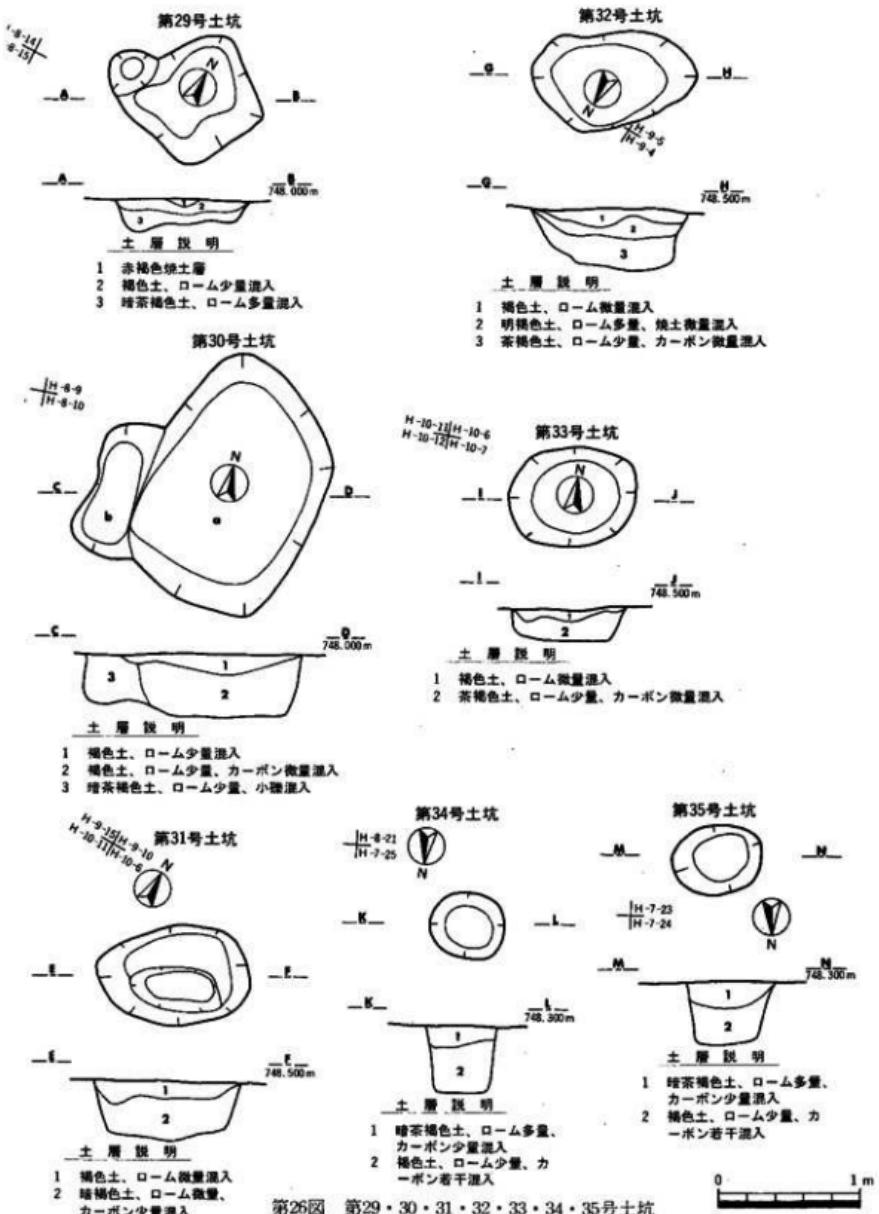
第21号土坑



1 糙茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入  
2 黒褐色土、ローム少量、カーボン微量、焼土若干混入

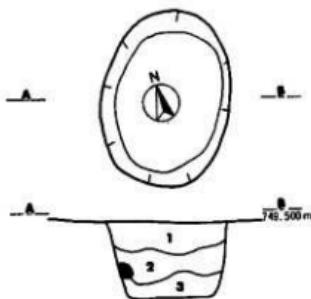


第25図 第21・23・24・25・26・27号土坑



第36号土坑

H-2  
H-3



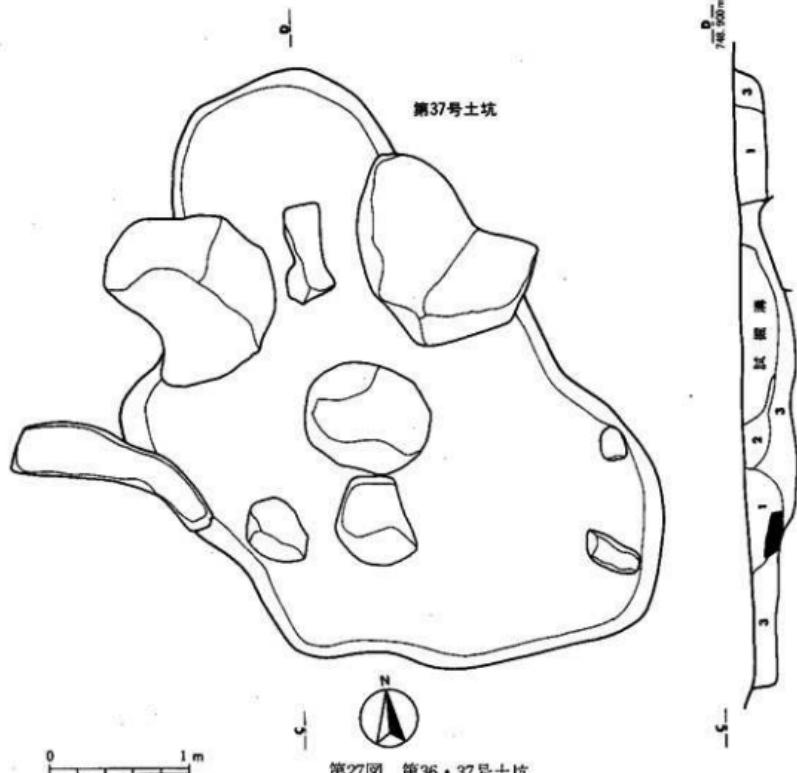
第36号土坑土層説明

- 1 茶褐色土、ローム少量混入
- 2 茶褐色土、ローム少量、小礫混入
- 3 褐色土、ローム微量混入

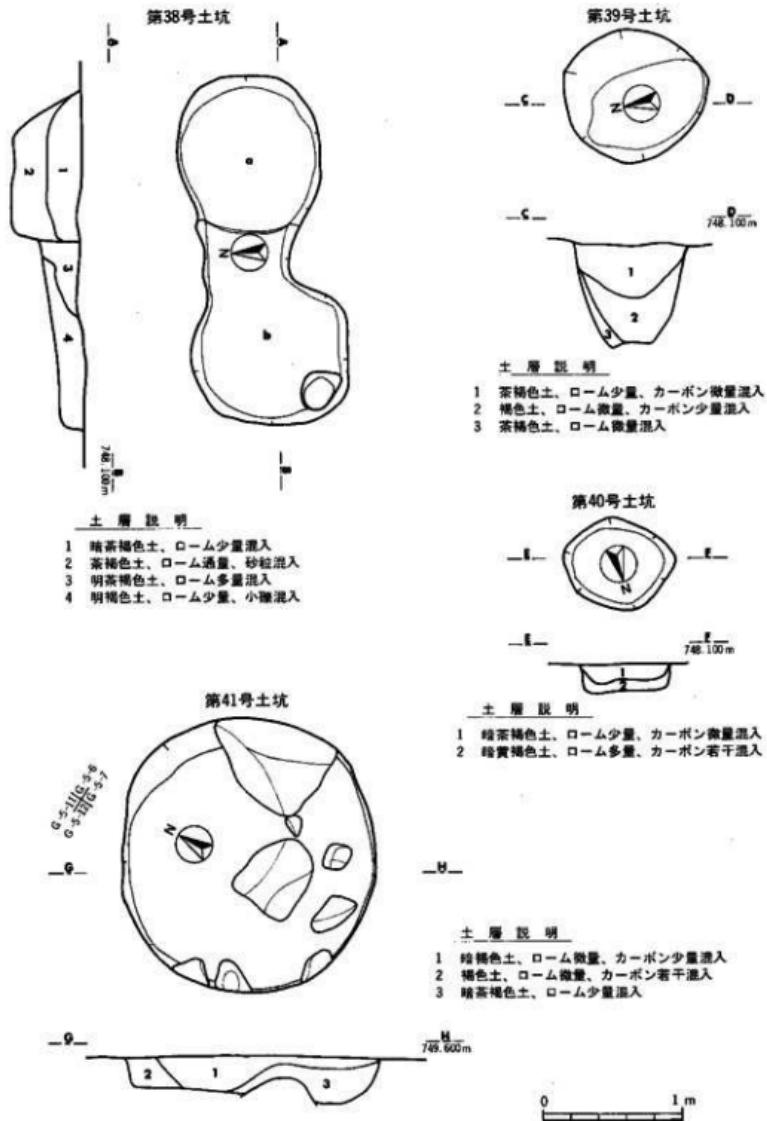
第37号土坑土層説明

- 1 茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入
- 2 茶褐色土、ローム少量、カーボン少量、焼土若干混入
- 3 茶褐色土、ローム少量、カーボン少量混入

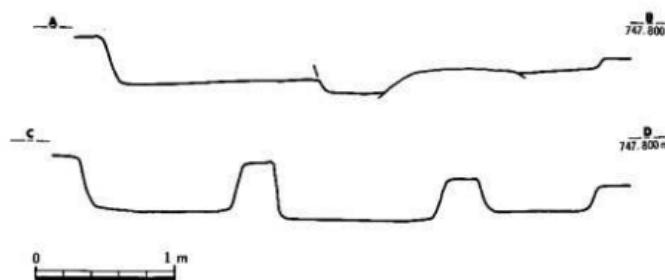
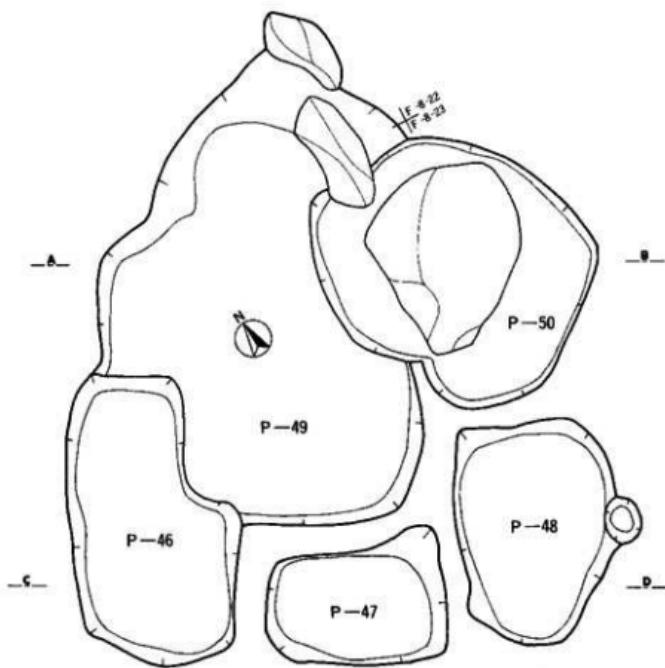
第37号土坑



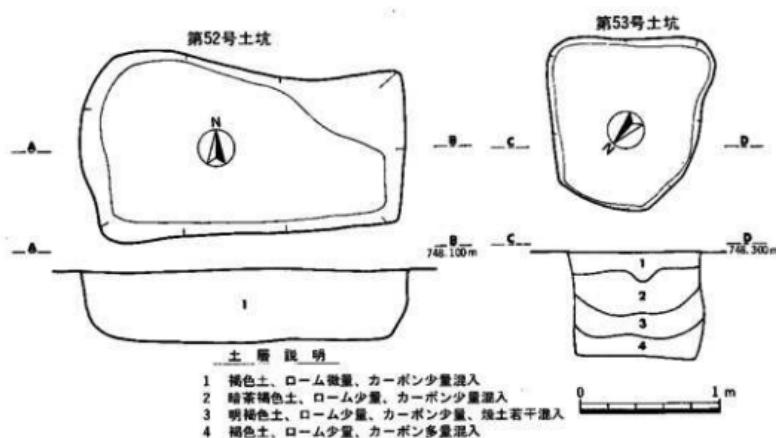
第27図 第36・37号土坑



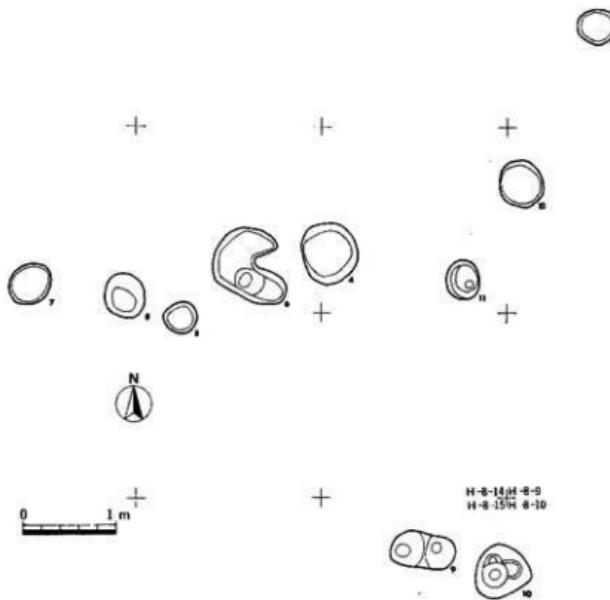
第28図 第38・39・40・41号土坑



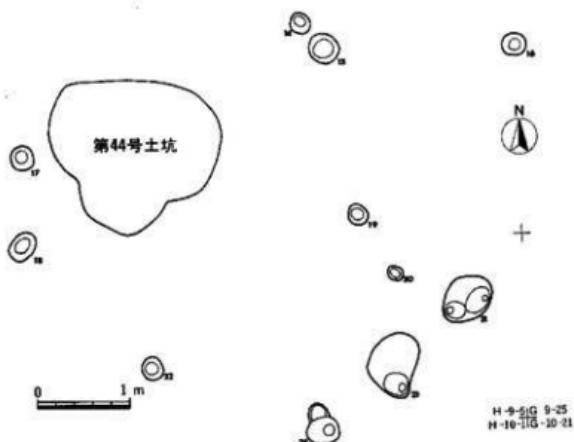
第29図 第46・47・48・49・50号上坑



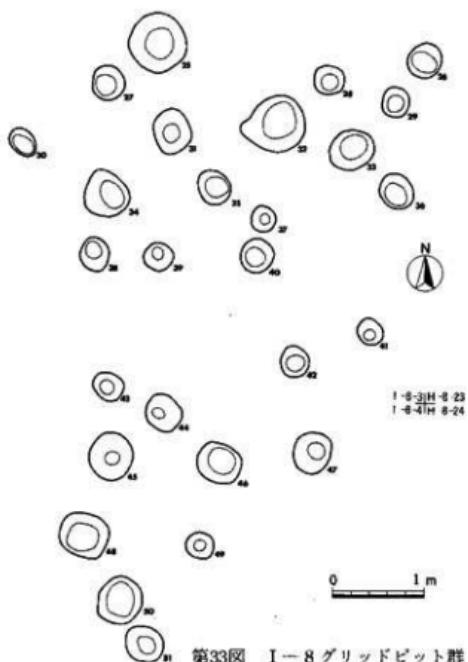
第30図 第52・53号土坑



第31図 H-8 グリッドピット群



第32図 H-9 グリッドピット群



第33図 I-8 グリッドピット群

## 第V章 出土遺物

### 第1節 土器・陶磁器

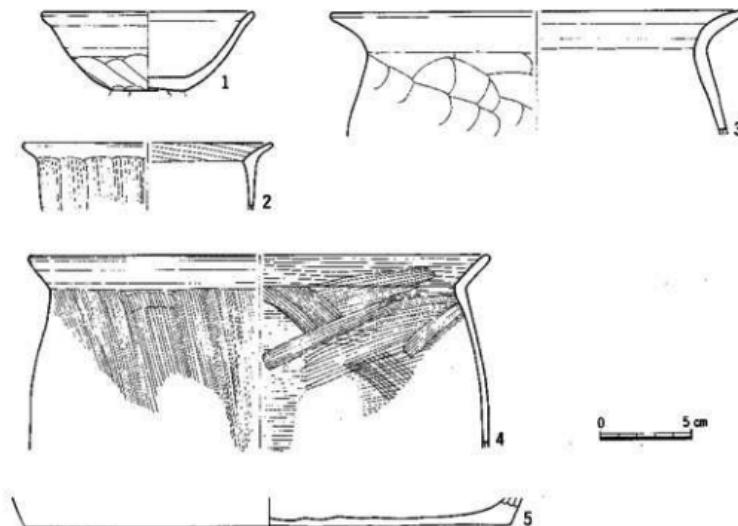
今回出土した土器は、住居址内、土坑内、遺構確認面の三者に大別される。住居址は既述の如く第1・3号住居址が中心であり、土坑では集石遺構がその中心となっている。また、遺構確認面では調査区東側を中心に青磁を含む、ある程度の資料が得られた。

以下、住居址内出土土器より報告する。

#### 1. 住居址出土土器

##### 第1号住居址出土土器（第34図）

本址からは土師器壺1、同壺1、同甕2、内耳土器1の計5点が出土しており、1～4が本住居址に伴うものである。1は土師器壺で、口径11.4cm、底径3.9cm、器高4.2cmという法量をもつ。体部は横ナデの後、下半を斜め方向に手持ちヘラケズリするもので、内側気味に緩やかに立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸い。底部は回転糸切り離し後、外周を手持ちヘラケ



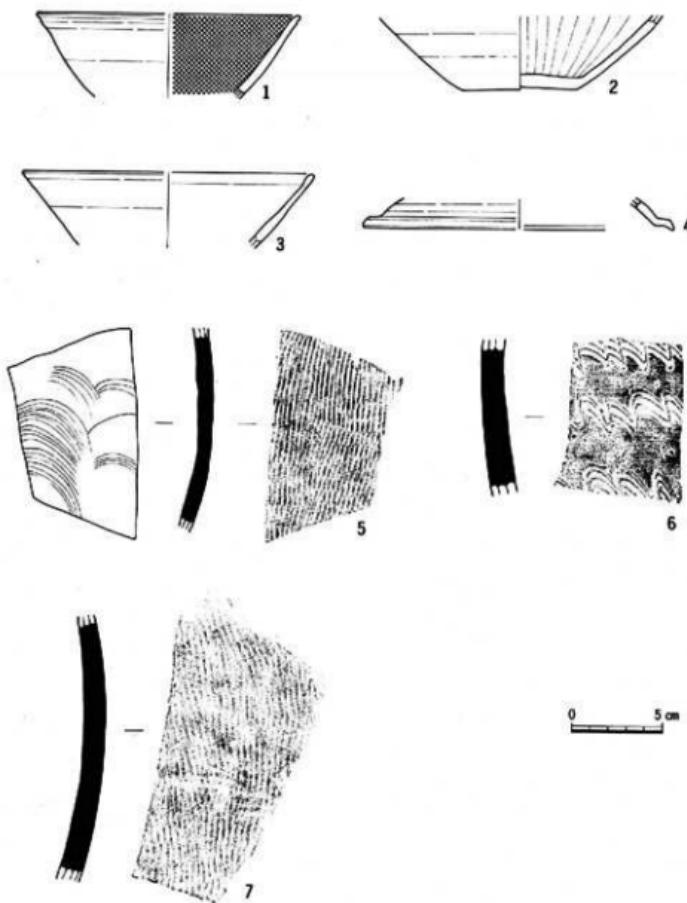
第34図 第1号住居址出土土器

ズリするもので、ほぼ完形である。胎土に赤色粒子を混入し、緻密で比較的良好な胎土である。焼成は良好で堅密に仕上がっており、色調は暗赤褐色を呈している。2は小型壺で、口縁部から体部へかけて遺存するものである。口径は13.5cmを測る。体部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は「く」の字状に鋭く外反し、端部は丸い。体部外面に縱方向のハケメ調整を、また、口縁部内面に横方向へのハケメ調整を施している。胎土に径1mm大の砂粒及び金雲母を混入し、全体的に粗く、良好な胎土とはいえない。しかしながら焼成は比較的良好で、色調は暗赤褐色を呈している。3・4は土師器壺である。いずれも口縁から体部にかけての遺存である。3は口径22.3cmを測り、丸味をもつ「く」の字状の口縁を呈し、端部は丸い。体部外面を斜め方向にヘラケズリしている。微砂粒を混入するものの胎土・焼成ともに良好で、色調は淡黄色を呈する。4は口径25cmを測り、「く」の字状のはっきりした口縁をもち、端部は丸味を帯びた角状を呈する。体部外面に縱方向へのハケメ調整、体部内面及び口縁部内面に横方向へのハケメ調整をそれぞれ施している。胎土は径1mm以下の小砂粒及び金雲母を含み、粒子は粗いが、焼成は比較的良好で、暗赤褐色を呈している。以上の4点は本住居址に直接伴うものであり、1はカマド前庭部、2~4がカマド内より出土している。5は覆土の最上層より出土した内耳土器である。底部のみの遺存であり、底径27.3cmを測る。胎土は径0.5mm以下の小砂粒を混入するものの、粒子は細かく、焼成も比較的良好である。色調は暗黄褐色を呈している。

以上述べてきた遺物より、本住居址の年代は10世紀第I四半期を中心とする年代（註1）が与えられよう。

### 第3号住居址出土土器（第35図）

本址からは土師器壺3、同蓋1、須恵器甕3の計7点が出土しており、1~3がカマド内よりの出土である。1~3は土師器壺である。1は口縁部の1/4の残存であるが、推定口径14.2cmを測る。体部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。端部は丸い。胎土は径1mm以下の微砂粒を混入し、焼成は通有、色調は淡黄色を呈する。内面黒色処理される、所謂「内黒土器」である。2は底部から体部にかけて全体の1/4が残存するものである。底径6.2cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。胎土は微砂粒を混入するものの緻密で良好、焼成も良好で堅密に仕上げてあり、色調は暗赤褐色を呈する。底部は右方向の全面回転ヘラケズリ調整が施されている。内面には体部において放射状暗文がみられる。3は口縁部の1/6が残存するもので、推定口径15.8cmを測る。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はわずかながら内彎気味であり、端部は丸い。胎土・焼成・色調とも2と類似しており、あるいは同一個体であるかもしれない。4は土師器壺蓋で、口縁部のみの残存である。推定口径17cmを測る。かえりは消失しており、口縁部は外反気味に開く。胎土は径0.1mm以下の微砂粒及び黑雲母を混入するものの緻密で、焼成も良好、堅密であり、色調は暗赤褐色を呈する。5~7は須恵器甕である。いずれも破片であり、全容を把握するほどのものではない。6は頸部である。波状文様が施されるものである。



第35図 第3号住居址出土土器

胎土に径0.1mm大の砂粒を混入し、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。5と7は体部である。5は内外面にタタキ目が、7は外面にタタキ目がみられる。いずれも胎土に径1mmの大の小石を含み、焼成は通有、色調は赤褐色を呈している。

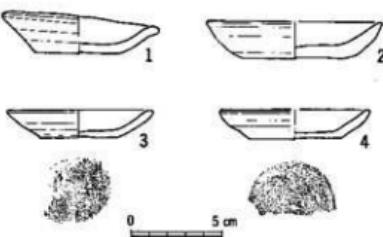
以上の遺物より、本住居址の年代は10世紀前半の、第Ⅰ四半期から第Ⅱ四半期にかけての時期が与えられよう。

## 2. 土坑出土土器

第1号集石出土土器（第36図）

実測可能であったのは土師質土器4点であった。1は口径8.5cm、底径4.6cm、器高2cmを測る。口縁はやや外反し、底部回転糸切り離し後無調整であるが、磨滅が著しく、わずかに痕跡を残すに過ぎない。胎土に微砂粒を混入し、焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。2は口径

9.5cm、底径5.5cm、器高2cmを測り、やや内彎気味に体部は立ち上がり、肉は厚い。底部は回転糸切り離し後無調整であるが、磨滅が著しい。胎土に径0.5mm以下的小砂粒を混入する。3は口径7.9cm、底径4.1cm、器高1.5cmを測る。底部回転糸切り離し後無調整のものである。胎土には黒雲母を混入する。4は口径8.1cm、底径4.9cm、器高1.6cmを測るもので、やはり底部回転糸切り離し後無調整のものである。体部下半に稜をもつ。胎土に金雲母を混入する。



第36図 第1号集石出土土器

## 3. 遺構確認面出土土器

縄文土器（第37図1～5）

C-3、I-3グリットより数点出土しており、1は新道式期、2・4・5は堀ノ内II式期3は晩期の所産のものである。

灰釉陶器（第37図6）

E-6グリッドより灰釉陶器壺底部片が出土している。高台を有し、高台径15.4cm、高台の高さ1.7cmを測るもので、高台端部は丸い。胎土は緻密で、焼成は良好、堅緻に仕上っている。底部は回転ヘラケズリによる調整を施している。

内耳土器（第37図7）

H-6グリッドより出土したもので、口径28.5cmを測る。胎土は黑色粒子を混入し、粗雑である。外面には2次焼成によると思われるススが付着している。

遺構確認面においてはこの他にも縄文土器、土師器等が出土しているが、いずれも細片であり、実測・図示し得るほどのものではない。

## 4. 陶磁器

青磁（第38図1～

22）

本遺跡より青磁は22点出土している。これらはいずれも破片であるが、その発色より概ね3つに分類される。

すなわち、

- A：深い緑色を呈するもの
  - B：淡い明緑色を呈するもの
  - C：褐色がかった緑色を呈するもの
- の3種である。

1～14はAのものである。1～5は口縁部で、このうち5を除く4点に片切彫りによる蓮弁文が認められる。

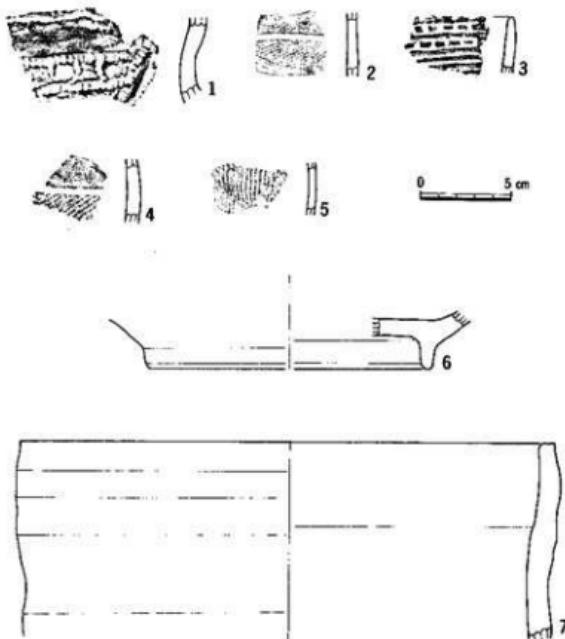
6～9は体部下半で、

6には片切彫りの蓮弁文（あるいは鳥の翼か？）が内面に施され、また7・8には蓮弁文が外面にみられる。10～14は体部片で、2点に蓮弁文がみられる。いずれも釉は薄く、透明感があるが、9は幾分乳濁している。15～17の3点はBである。すべて体部片で、蓮弁文が認められる。釉は薄く、透明であるが、15は気泡を含んでいる。18～22の5点がCである。いずれも体部であり、18・19には片切彫り蓮弁文がみられる。釉は薄く、透明感がある。1は53号土坑、7は7号住居址、9・12・13・17・18はC—4グリッド、5はG—6グリッド、21はG—10グリッド、他はE—6グリッドより出土している。

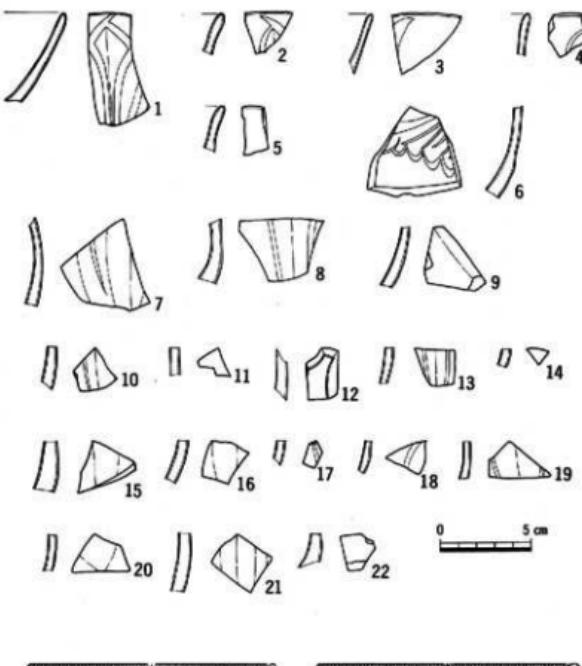
青磁に限らず、舶載陶磁器の研究は決して充分とはいえない、問題を残しているが、現在のところ、龍泉窯系の蓮弁文碗が南宋後半に比定されているので、本遺跡出土青磁も13世紀から14世紀の所産と思われ、廃棄された時期はある程度の幅をもたせても14世紀後半に入るものと考えられる。

天目茶碗（第38図23）

G—10グリッドより天目茶碗片が出土している。口縁から体部にかけて、全体の1／10程度



第37図 遺構確認面出土土器



第38図 陶磁器 (1)

の遺存であるが、図上復元の限りでは口径13.4cmを測る。体部はほぼ直線的に斜めに立ち上がり、上半部においてなめらかに屈曲して、やや内輪気味に直上し、口縁はわずかながら外反して、端部は玉縁状を呈している。胎土は淡黄白色を呈し、非常に歯質なものである。釉は体部より上半に天目釉を施していると思われる。本遺物は美濃製で、16世紀末より17世紀初頭の年代が与えられよう。

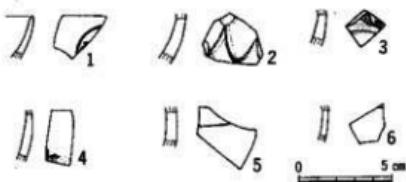
#### 鉄釉碗 (第38図24)

全体の1/4の遺存で、推定口径14.3cmを測る。体部は内輪気味に立ち上がり、口縁は玉状

を呈する。釉は体部上半に施される。胎土は緻密である。先の天目茶碗同様、美濃製のものであり、その所産も16世紀末より17世紀初頭の年代が与えられる。

#### 染付（第39図1～6）

1・4・5・6がC-4グリッド、2・3がB-3グリッドより出土している。いずれも細片である。いずれも初期伊万里と思われ、特に2は染付網手文（小壺？）と思われる。したがって17世紀初頭の年代が与えられる。



第39図 胸磁器（2）

以上のように、胸磁器は遺物数からみれば比較的豊富で、特に青磁は小片ながら22点と多く注目される。そして、中世から近世、すなわち13世紀から17世紀へかけての遺物がみられるることは小和田館跡及び深草館跡の存続期間を考えるうえで注目されるものである。

## 第2節 石製品・土製品

本遺跡より縄文時代の石鎚6点、石斧2点、用途不明土製品1点、砥石4点、石臼2点、石擂鉢3点、五輪塔3点が出土している。

#### 石鎚（第40図1～6）

いずれも黒曜石製のもので、1は4号住居址覆土中より、2はD-5グリッド、3・6はE-6グリッド、4は7号住居址覆土中より、5はG-8グリッドより、それぞれ出土している。

#### 石斧（第40図7・8）

7は磨製石斧で緑泥片岩製のものである。先端を欠くが、非常にシャープに、丁寧に仕上げられている。8は打製石斧である。安山岩製のもので、肉は薄い。前者はC-3グリッド、後者はJ-2グリッドより出土している。

#### 用途不明土製品（第41図）

G-10グリッドより出土している。先端部を欠く。後足があり、体部横に線刻を施しており、獸を模したものか、あるいは土器把手の一部か不明瞭なところである。現存長4.2cm、幅1.5～2.5cmを測る。

以上は縄文時代の所産のものであり、以下は中世の所産のものである。

### 砥石 (第42図)

1は35号土坑出土のものである。よく使用され、2面を砥石面として使用する、砂岩系の軟質なものである。

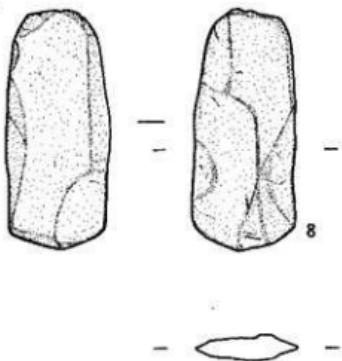
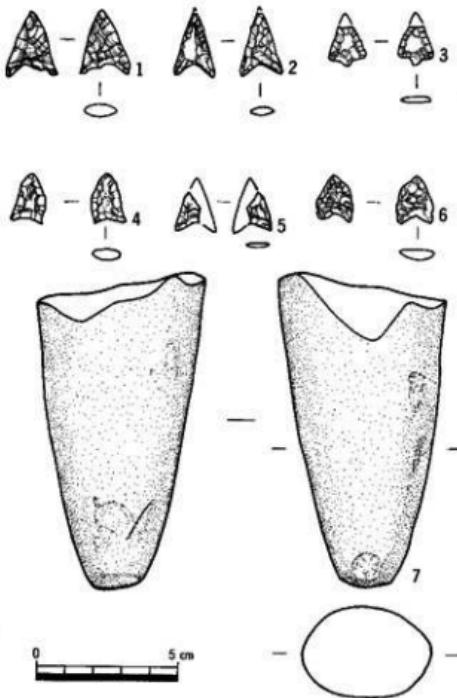
2はB-3グリット出土のもので両端部を欠損する。2面を砥石面として使用する。側面には10~11条程度の沈線が施されている。硬質の泥岩製である。3はE-6グリット出土のもので身半分を欠く。3面を砥石面として使用する。砂岩系の比較的軟質のものである。

4は1号集石内より出土したもので、硬質な泥岩製のものである。2面を砥石として使用しており、よく研磨されている。側面に沈線が施される。

1・2は手持ち砥石、3・4は置き砥石と考えられ、集石や土坑内からの出土がみられることは注目される。そして、こうした砥石の存在は金属製品の生産や加工に係るものであり、今後の一層の検討が求められる。

### 石臼 (第43図1・2)

1号集石内より2点出土している。いずれも粉挽き臼の上臼であるが、磨滅が著しく、全体の1/3程の



第40図 石 器

遺存である。1は直径17.4cm、高さ8.3cm、上縁幅11.8cm、上縁高1.7cmを測るものである。2は磨滅著しく、上縁部は明瞭にし得ない。いずれもすり合わせ面は明瞭にし得ない。

#### 石壠鉢（第43図3～5）

3点出土している。3点と

も全体の1/4から1/3にかけての遺存である。3はF-8グリッドより出土したもので、口径15.9cm、底径13.0cm、高さ10.2cmを測る。4・5ともに1号集石より出土している。4は口径15.9cm、底径16.0cm、高さ9.5cmを測る。5は口径18.8cm、底径16.1cm、高さ10.1cmを測る。いずれも磨擦痕は不明瞭である。

#### 五輪塔（第43図6～8）

空・風輪2体、水輪1体がとともに1号集石内より出土している。6は空・風輪で良好な遺存状態である。全長23.3cm、そのうち空輪の長さ15.4cm、幅17.6cm、風輪の長さ7.9cm、幅15.9cmを測る。一石より造られており、火輪に接続する柄は付かない。7も空・風輪であるが、磨滅が著しく、わずかに空輪の頂部を窺い知るのみで、風輪は輪郭すらわからぬ。全長17.9cm、幅4.8～12.4cmを測る。8は水輪である。径23.4×22.6cm、高さ18.6cmを測り、上部に径10～15cm、深さ5.5cmの穴を穿っている。おそらく納入物を入れたものと考えられる。これらの五輪塔に梵字等の線刻はみられなかった。



### 第3節 金 屬 製 品

本遺跡より出土した金属製品は金箔付銅製碗蓋、古錢14枚、刀子4本、キセル1本、釘等である。

#### 金箔付銅製碗蓋（図版4）

5号住居址床直上より出土しており、出土遺物中最も注目されるものである。本遺物は現在修復・分析中であり、実測図は追って報告することとし、ここでは写真図版をもとに報告する。口径12.5cm、器高5.0cm、つまみ径5.0cm、つまみ高0.5cmを測り、器肉は0.1～0.2cmで非常に薄く、打ち出しによる成形である。体部及びつまみ部に打ち出しによる草木文様が施されており、外面全体に金箔を貼付するものである。こうした遺物の類例は全国的にみてもなく、年代

的にみても非常に注目されるものである。5号住居址からは後述するよう「聖宋元宝」が覆土中より出土しており、ある程度の幅をもたせても12~14世紀代の年代が想定でき、分析結果を待って改めて論じたいと思う。

#### 古銭（第44図）

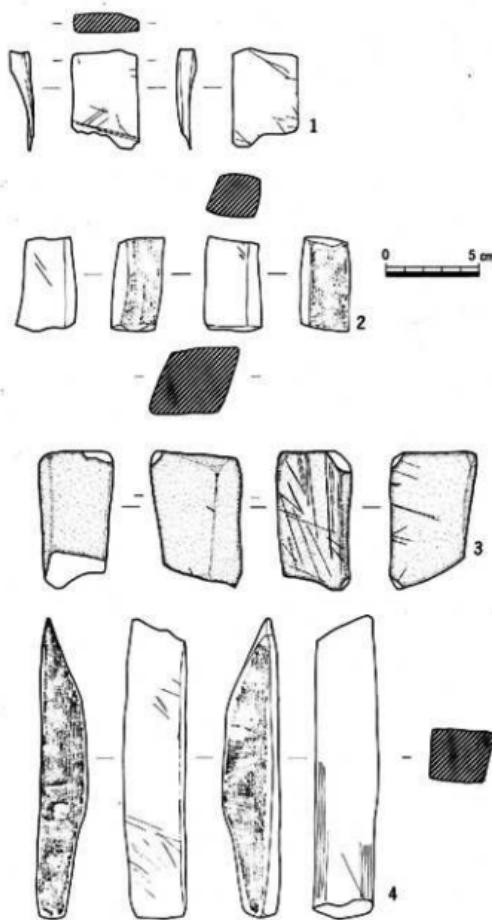
本遺跡より14枚の古銭が出土しており、13を除いてすべて波来銭である。1~7は遺構出土のもので、1は5号住、2は7号住、3は1号溝、4・5は37号土坑、6は43号土坑、7は46号土坑より出土している。8~13は遺構確認面よりの出土である。5・12は腐食著しく、銭貨名を明確にし得ないが、それ以外のものは良好であり、聖宋元宝、嘉祐元宝、天聖元宝、熙寧元宝、元祐通宝、元符通宝、祥符元宝、景祐元宝の8種類の北宋銭と寛永通宝である。

#### 刀子（第45図1~4）

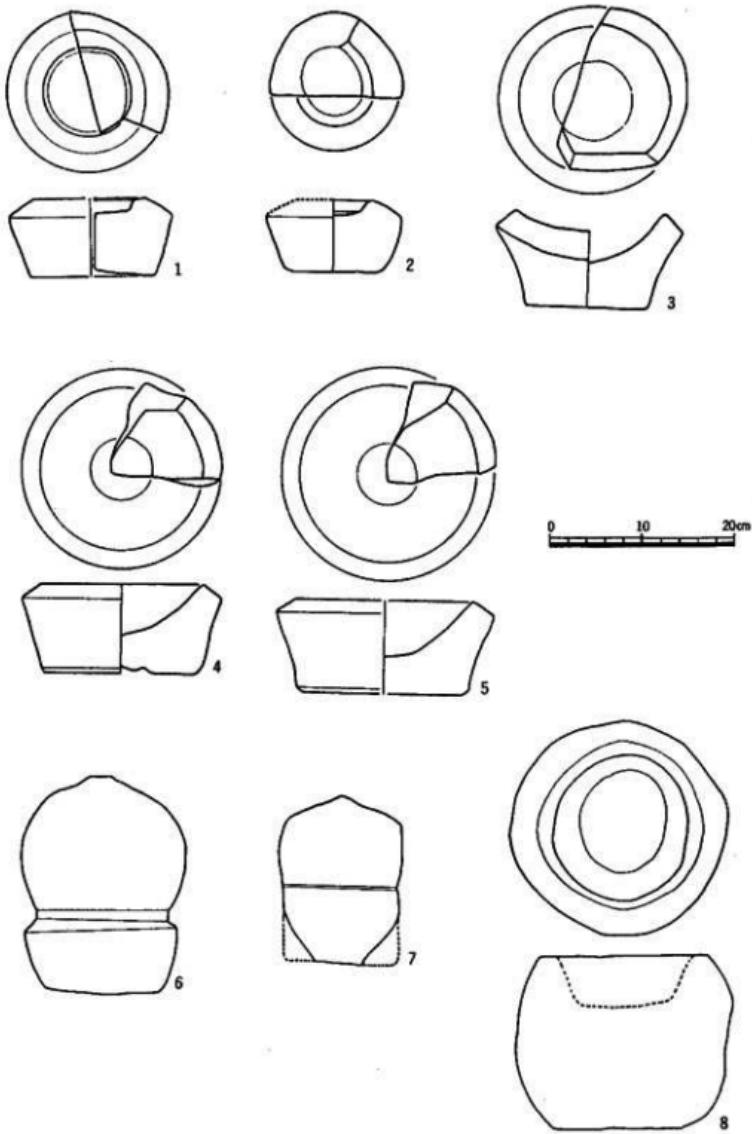
1のみほぼ完存であるが、全て腐食が著しい。2は8号住居址覆土中よりの出土で、他は確認面出土である。

#### その他（第45図5~7）

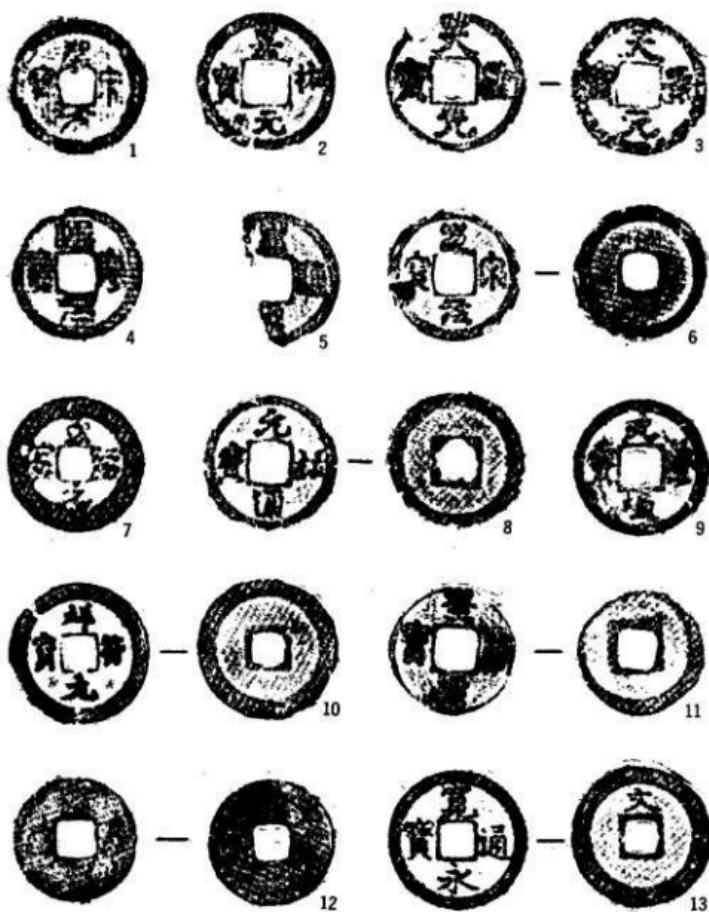
5はキセルで火皿と雁首部の遺存である。遺存状態は比較的良好であるが、雁首の身半分は



第42図 砥 石



第43図 石擂鉢及び五輪塔



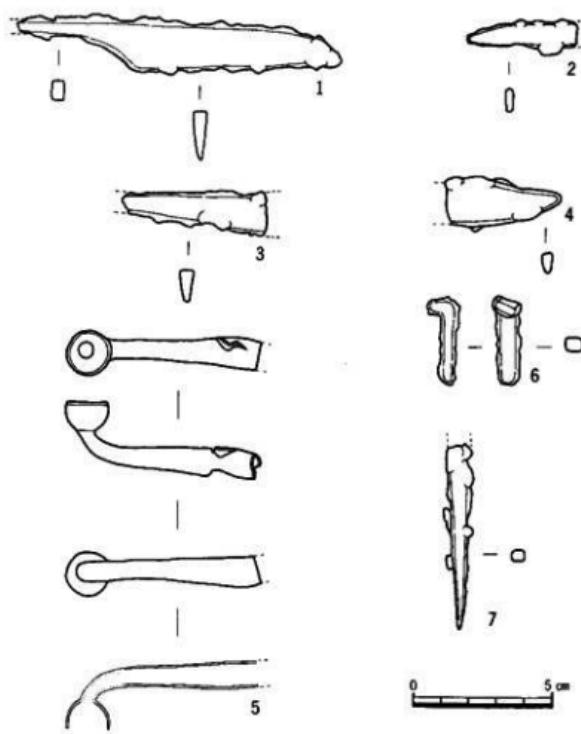
第44図 古 錢

欠損している。

内部に繊維状の  
炭化物がある。

6は先端を欠き、  
身の短い釘である。7は用途不  
明鉄製品で角棒  
状を呈する。鐵  
鑑の範囲部の可  
能性もある。

本遺跡出土の  
金属製品はその  
出土状況よりみ  
て、中世の所産  
であると考えら  
れる。その中で  
も特に金箔付銅  
製碗蓋は本遺跡  
の性格を考える  
上でも貴重な資  
料であるといえ  
る。

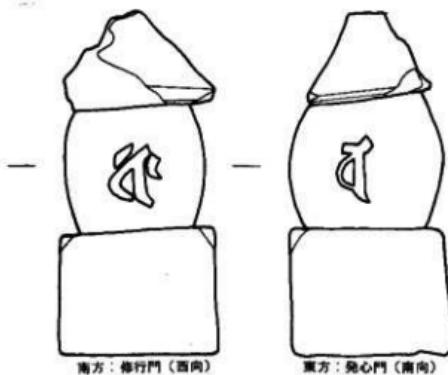


第45図 遺構及び確認面出土金属製品

#### 第4節 そ の 他

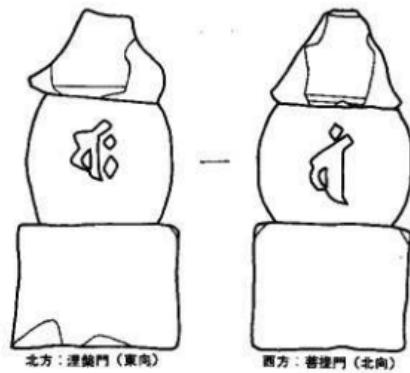
##### 調査区外五輪塔（第46図）

これは調査区外、大八田2562に位置する五輪塔である。空・風輪を欠くものの、火輪・水輪・地輪が現存する。火輪は損傷が著しい。水輪には四面にそれぞれ「バ」「バー」「パン」「パク」の梵字が刻まれているが、火輪及び地輪には認められない。この五輪塔はその形態より鎌倉時代のものと考えられ、本遺跡及び深草館跡との関連が想定され得るものである。また、この五輪塔と並んで道祖神も鎮座しているが、これはさらに時代が下るものである。



南方：修行門（西向）

東方：免心門（南向）



北方：涅槃門（東向）

西方：菩提門（北向）



第46図 調査区外五輪塔

なお、本章を執筆するにあたり、県埋文センター田代孝氏、および小林真氏より有益な御助言を賜った。

## 第VI章 考 察

本年度における調査は以上のように昨年度調査区E区の延長上であり、連続して考えるべきであり、事実圃場整備事業に係る書類上は「小和田館跡」としている。しかしながら、本遺跡の位置からみても小和田館跡というよりはむしろ深草館跡の範疇として捉えられること、館跡の外側に隣接することなどから、本書ではこれを分離し、「小和田北遺跡」として統一してある。そこで、E区をふまえた上で若干の考察を行なって結びとしたい。

### 縄文時代

本遺跡より縄文時代と認識される遺構は検出されておらず、また出土した遺物も確認面よりの出土である。それは中期中葉より晩期にかけてのものであり、中期中葉の新道式のものは小和田においても5基が検出されている。また、後・晩期の著名な遺跡である金生遺跡が北約500mに、後期の集落址である別当遺跡が北西約800mに位置するなど、周辺に該期の遺跡が多く、来年度以降の調査区において当該期の集落の検出が予想されるものである。

### 平安時代

この時期の住居址は3軒検出されているが、E区においては6軒検出されている。何れも9世紀後半から10世紀にかけての所産である。住居址構造をみれば、4号位を除いてすべて東カマドを有しており、4号位のみ北カマドを有している。本遺跡の南約2kmに位置する柳坪遺跡群（註1）では現在までに70軒の平安時代住居址が検出されており、すべてが東カマドを有している。カマドの構築には当然風位を考慮するものであり、この長坂の地は、所謂「八ヶ岳おろし」と呼ばれる北、もしくは北西の風の吹く所であり、東カマドが最も妥当である。4号位は遺物がほとんどなく、時期決定が不安定であるが、住居構築に際して他の住居址との間に若干の時間差が認められるかもしれない。また、本遺跡の面積に比べると住居址の数は非常に少なく、集落と集落との狭間に位置しているものと思われる。こうしてみると柳坪一小和田一金生一城下一寺所と平安時代の集落址が多く、当時この付近が一大村落であったことがわかる。事実この地は古くから莊園として知られている（註2）が、注目すべきことは9世紀前半以前の、特に8世紀代の資料がほとんどみられないことがある（鬼高峰期までの資料はある程度得られている）。また、個々の集落をみると掘立柱建物址を伴っているなど、ある程度の規制が窺える。こうした点について萩原三雄氏はこれを公的権力と結び付いた開墾集落として捉えており、非常に注目すべき見解である（註3）。しかし、鬼高峰期まで生活していた人々が姿を消し、9世紀に入って再び入植したとは考えられず、少數ではあろうが8世紀代においても人々は生活しており、やがてより大規模な開発が行なわれたと考えられるのではないだろうか。

### 中世

本遺跡において最も成果のある時期である。小和田館跡で顕著にみられた9本柱を持つ堅穴

遺構は本遺跡においても第5号住居址1基が検出されている。しかし、両者の間にはいくつかの差違が認められる。一つはカーボンの有無である。あれほど確認されたカーボンの堆積は本址においては全くみられない。二つめに礎際に於ける内部へ張り出す掘り残し部分のないことが挙げられる。こうした差は何に起因するものであろうか。小和田館跡におけるこうした豊穴遺構は概ね15世紀という年代が与えられているが、本址のそれは13~14世紀という年代を想定している。単に時間差といってしまえばそれだけであるが、他の要因も考えられないだろうか。遺構の機能を考えると、これを住居として捉えるか、倉として捉えるかという問題がまずある。本址においては、カーボンの堆積のみられないこと、遺構内に巨石の入り込んでいること等からみて、後者としての性格が強いものと考える。住居として考えた場合、住居の中央に柱があったのでは空間的に窮屈であったろうし、置きカマドにしても住居の中央を占有していくのでは不都合であったろう。また、本址が深草館の範疇であることも考慮すべき点であろう。

次に五輪塔を出土した集石について述べてみたい。この集石についてはその出土遺物より13~14世紀の年代が想定される。当時において五輪塔はといえば、支配者層によって造立された一種のスティタス・シンボルであった。そうしたものが部分的であるにせよ一つの遺構より出土したことは注目される。さらに当時の高級品ともいえる石臼や石擂鉢が併せて出土していることも注目される事象である。これらが一括廃棄されたものか、意図的に廃棄されたものであるかは、出土状況からはどちらともいえるが、仮に前者とした場合、小礫と共に廃棄する理由を見出しができない。従って、こうした石製品を意識的に廃棄した、精神活動の場としての性格を想定したい。

最後に、深草館跡の外郭部より青磁が出土している。これらは廃棄したものと考えられるが量的にみれば破片とはいえ、12~14世紀の資料としては豊富であり、金生遺跡B区の資料と併せて深草館跡の性格を考える上で非常に重要なものであり、非常に注目される。そして、深草館跡のもつ意味は長坂町の歴史のみならず、中世日本史を解明する上で、このうえもない位置を占むるものであることが示唆されたといえよう。そのため今後の調査・研究が注目されるものであり、無責任な調査に終ることのないよう努めなくてはならない。

註1 米田明訓氏の御教示による

註2 「逸見莊」「大八幡莊」等があるが、大八幡莊については小瀬沢町北野天神社の応永9年9月25日の銅口銘に「甲州大八幡庄山宮天神」とあるのが文献として唯一のものである。そのためにその存在が疑問視されており、秋山敏氏は現在の大八田が逸見莊に含まれることなどから、これを「大八田郷」という意味が強いという見解を示している。

註3 北伊勢郡下における平安時代の集落は9世紀後半代に著しく増大し、11世紀代で終焉しており、掘立柱建物址や鐵治工房を作った特徴とする。こうした事象に対しての萩原氏の見解は卓越したものといえる。

## 参考文献

- 磯貝正義 『都司及び采女制度の研究』 吉川弘文館 1978
- 上田秀夫 「14~16世紀の青磁碗の分類について」 『貿易陶磁研究』 No.2  
日本貿易陶磁研究会 1982
- 服部実喜 「関東地方出土の輸入陶磁器について」 『神奈川考古』 20号  
神奈川考古同人会 1985
- 神奈川考古同人会『シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と  
周辺地域の様相』 1983
- 『浜町屋敷内遺跡C地点』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
- 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 北巨摩郡長坂・明野・並  
崎地内』 山梨県教育委員会 1975
- 『小和田館跡発掘調査概報』 長坂町教育委員会 1984・1985

第1表 土坑集成表

Nr.	グリッド	形 状	規 模(cm)	深 さ(cm)	出 土 遺 物	備 考
1	Q - 5	椭 圆 形	220×154	1 4		
a	Q - 5	円 形	87×72	1 2		b、cに先行
2 b	Q - 5	円 形	150×120	2 2		
c	Q - 5	円 形	136×105	1 7		
3	Q - 5	円 形	130×100	2 6		
4	Q - 3	円 形	170×150	5 2	内耳土器片、陶器片	集石土坑
6	R - 7	長 方 形	170×120	7 2	陶器片	
7	R - 7	円 形	90×90	5 6		
8	Q - 6	不整円形	205×100	1 6		2基?
9	Q - 6	円 形	135×116	1 7		
10	Q - 7	円 形	125×100	1 9		
11	Q - 7	椭 圆 形	130×74	2 5		
12	Q - 7	椭 圆 形	175×86	1 4		
13	L - 8	正 方 形	257×236	9 1	土師器片、須恵器片、陶器片	地下式土壤
14	I - 4	椭 圆 形	187×76	1 7		
15	J - 6	椭 圆 形	92×43	3 0		2基?
16	K - 6	円 形	86×70	4 8		
17	K - 6	円 形	110×90	4 2		
18	K - 6	椭 圆 形	76×55	4 2		
19	二 5 5	円 形	174×167	2 8		
20	L - 7	円 形	122×97	2 0		
21	K - 7	椭 圆 形	242×100	2 6		
23	H - 9	円 形	119×114	2 8		
24	H - 9	円 形	110×96	2 4		
25	H - 9	円 形	107×102	4 7		
26	H - 9	円 形	110×104	3 0		
27	H - 9	円 形	120×108	2 5		
28	H - 10	不整円形	294×253	3 5		集石土坑
29	H - 8	方 形	110×80	1 9		
a	H - 8	方 形	185×150	4 6	土師器坏底片	
b	H - 8	方 形	95×30	3 5		

Nr.	グリッド	形 状	規 模 (cm)	深 さ (cm)	出 土 遺 物	備 考
31	H-10	円 形	110×71	4 8		
32	G-9	楕 圆 形	119×66	4 5		
33	H-10	円 形	92×70	2 6		
34	H-7	円 形	64×49	4 6	陶器片、釘	
35	H-7	椭 圆 形	52×47	5 0	砥石	
36	H-5	円 形	16×91	5 2		
37	G-6 H-6	不 整 形	476×315	3 7	青磁片、古銭2、陶器片	複数?
38	a	H-8	円 形	112×102	5 0	土器片
	b	H-8	円 形	136×110	2 9	aに先行
39	H-8	円 形	101×88	6 5		
40	H-8	円 形	81×60	2 0		
41	G-5	円 形	190×180	3 0	土器片	
43	G-5	椭 圆 形	326×240	4 2	古銭1、馬齒	集石土坑
44	H-9	方 形	186×110	8 0		地下式土壤
46	G-8	方 形	205×83	4 0		
47	G-8	方 形	117×80	2 9		
48	G-8	方 形	159×88	3 2		
49	G-8	椭 圆 形	308×150	3 2		
50	G-8	不整円形	262×193	2 0		
51	G-9	円 形	103×90	3 0		集石土坑
52	H-8	方 形	231×110	5 5		
53	H-7	方 形	120×107	7 5		

註：第5・22・42・45号土坑は欠番。

## 第2表 ピット集成表

### G-5 グリッド

Nr.	形 状	規 模(cm)	深 さ(cm)	出 土 遺 物	覆 土	備 考
1	椭円形	62×40	40		S	
2	椭円形	40×28	18.1		S	
3	椭円形	45×27	11		S	

### H-8 グリッド

Nr.	形 状	規 模(cm)	深 さ(cm)	出 土 遺 物	覆 土	備 考
4	円 形	67×59	19		C	
5	円 形	39×34	9.6		D	
6	円 形	50×45	9.6		C	
7	椭円形	94×40	22.9		D	
8	円 形	50×40	43.4		D	
9	椭円形	70×36	41		A	
10	円 形	60×50	50.5		A	
11	円 形	40×35	32		C	
12	円 形	41×39	23.3		A	
13	円 形	51×57	59		A	

### H-9 グリッド

Nr.	形 状	規 模(cm)	深 さ(cm)	出 土 遺 物	覆 土	備 考
14	椭円形	47×23	29		A	
15	円 形	30×25	9.2		A	
16	椭円形	34×26	16.4		A	
17	円 形	25×22	11.2		A	
18	円 形	25×22	24.3		A	
19	円 形	35×33	12.5		A	
20	円 形	24×22	22.7		A	
21	不整円形	64×52	14.3		A	
22	椭円形	17×13	20.8		A	

Nr.	形 状	規 模(cm)	深 さ(cm)	出 土 遺 物	覆 土	備 考
23	楕 円 形	60×43	2 8		A	
24	円 形	25×22	10.7		A	

I-8 グリッド

Nr.	形 状	規 模(cm)	深 さ(cm)	出 土 遺 物	覆 土	備 考
25	円 形	64×60	18.3		B	
26	円 形	39×37	36.3		A	
27	円 形	38×36	50.5		B	
28	円 形	35×33	18.9		B	
29	円 形	35×30	7.9		B	
30	円 形	37×25	23.5		B	
31	円 形	54×40	21.6		B	
32	椭 円 形	70×57	36.3		B	
33	円 形	49×40	28.1		B	
34	円 形	50×45	69.2		A	
35	円 形	37×35	28.8		A	
36	円 形	51×34	21.3	陶器片	B	
37	円 形	30×27	10.7		A	
38	円 形	37×31	55.5		B	
39	円 形	33×31	19.5		A	
40	円 形	38×37	28.5		A	
41	円 形	30×25	17.7		A	
42	円 形	32×31	20.5		A	
43	円 形	33×28	1 7		A	
44	円 形	42×37	43.5		A	
45	円 形	52×48	58.8	陶器片	A	
46	円 形	51×42	26.1		A	
47	円 形	45×40	25.9		A	
48	円 形	55×46	34.9		B	
49	円 形	31×28	19.4		A	
50	円 形	55×53	37.1		A	

Nr.	グリッド	規模(cm)	深さ(cm)	出 土 遺 物	覆 土	備 考
51	円 形	44×40	2 0	黒曜石剝片	A	

註：本表内における覆土の記号の意味は以下に示す通りである。

- A 暗褐色土、ローム少量、焼土極微量、カーボン微量混入。
- B 上層：明褐色土、ローム少量混入。 下層：黄褐色土、小礫を含む。
- C 灰褐色土、ローム少量、小礫混入。
- D 暗茶褐色土、ローム少量、カーボン微量混入。

S セクション図あり。

第3表 金属器集成表

## 刀子

Nr.	全長 (cm)	身			茎			備 考	出土地点
		長さ (cm)	幅 (cm)	重ね (cm)	長さ (cm)	幅 (cm)	重ね (cm)		
1	11.6	9.1	0.8~ 1.7	0.2~ 0.5	2.5	0.5~ 0.7	0.4	茎の先端を欠損する	I-7 G r
2	3.9	—	—	—	3.9	0.3~ 1.0	0.2	茎から身にかけて欠損	8号住
3	5.2	(5.2)	0.8~ 1.6	0.3~ 0.5	—	—	—	身先端、茎欠損	C-4 G r
4	4.1	(4.1)	0.3~ 1.7	0.2~ 0.4	—	—	—	身中位以下欠損	E-6 G r

## その他

Nr.	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考	出土地点
5	6.9	0.6~1.0	0.1	キセル。火薬部の径1.6cm、高さ1.0cm、厚さ0.1cm、碗状を呈する。内部には炭化物が付着している。銅製。	H-7-2G r
6	3.1	0.4~0.6	0.5~0.6	釘。頭部0.8×0.9cmの長方形を呈す。	E-6 G r
7	6.4	0.2~1.0	0.2~0.3	用途不明鉄製品。断面方形で棒状を呈する。鍛の範囲か?	54号土坑

## 古銭

Nr.	錢貨名	出土地点	径 (cm)	重 (g)	初 鑄 年	書 体	國	備 考
1	聖宋元宝	5号住	2.4	1.4	建中靖国元年(1101)	篆	北宋	
2	嘉祐元宝	7号住	2.4	1.3	嘉祐年間(1056-63)	楷	北宋	
3	天聖元宝	1号溝	2.4	2.8	天聖元年(1068)	楷	北宋	2枚張り付いている
4	熙寧元宝	37号土坑	2.3	1.3	熙寧元年(1068)	楷	北宋	
5		37号土坑	2.4	0.7				縁を欠く
6	聖宋元宝	43号土坑	2.3	1.4	建中靖国元年(1101)	篆	北宋	
7	至道元宝	46号土坑	2.3	2.1	至道元年(995)	行	北宋	
8	元祐通宝	G-8グリッド	2.3	1.8	元祐元年(1086)	行	北宋	
9	元符通宝	K-6グリッド	2.4	1.8	元符元年(1098)	行	北宋	
10	祥符元宝	L-8グリッド	2.4	1.1	大中祥符元年(1008)	楷	北宋	
11	景德元宝	Q-6グリッド	2.2	1.0	景德元年(1034)	楷	北宋	
12		Q-7グリッド	2.2	1.2				
13	寛永通宝	E-6グリッド	2.4	1.5	寛文8年(1668)	楷	日本	背に「文」

第1図版

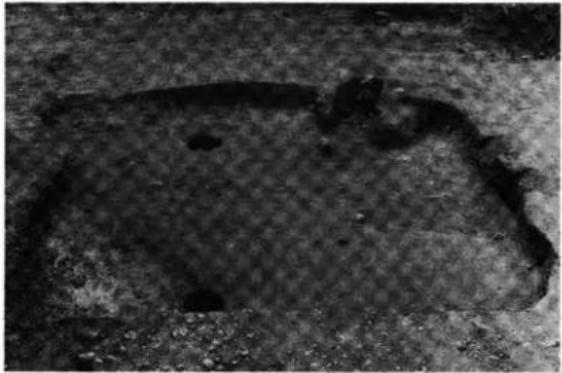
1. 遺跡全景（西から）



2. 遺跡全景（北から）



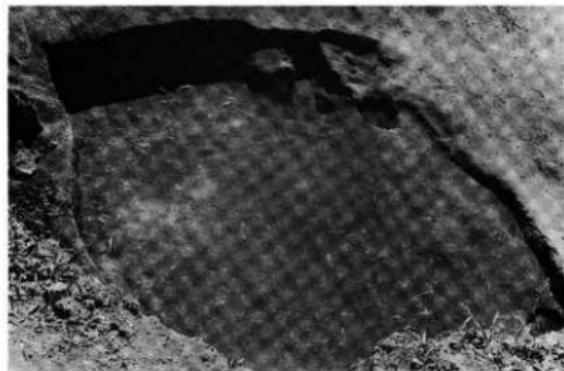
3. 第1号住居址



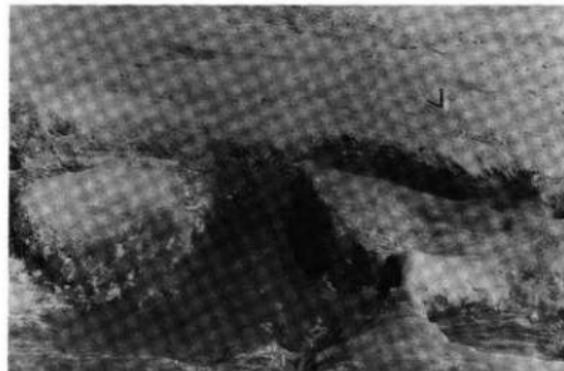
第2図版



1. 第1号住居址カマド



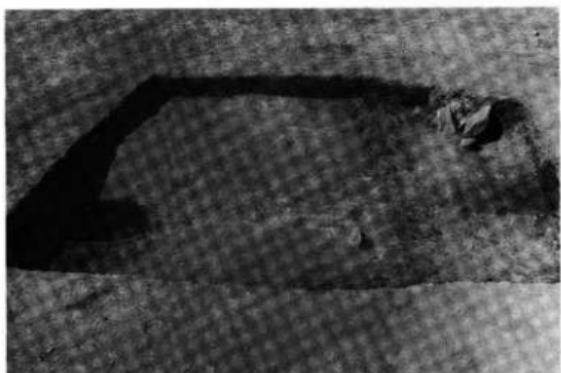
2. 第3号住居址



3. 第3号住居址カマド

第3図版

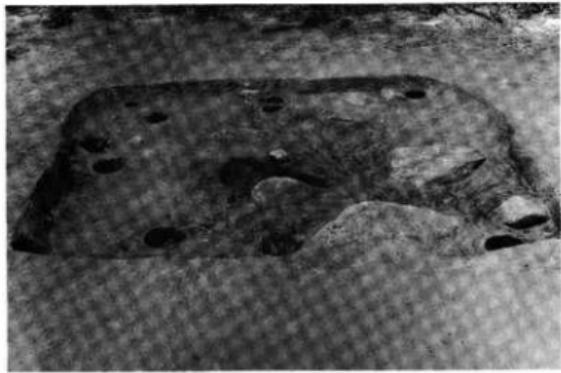
1. 第4号住居址



2. 第4号住居址カマド



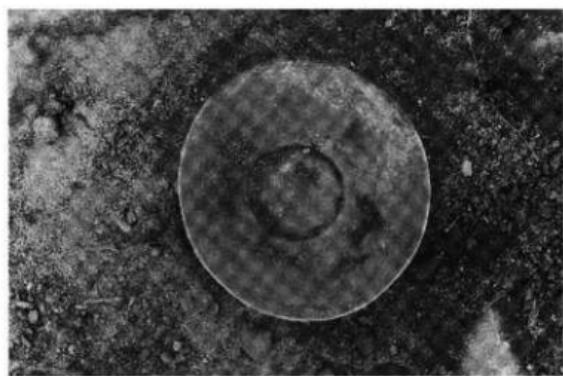
3. 第5号住居址



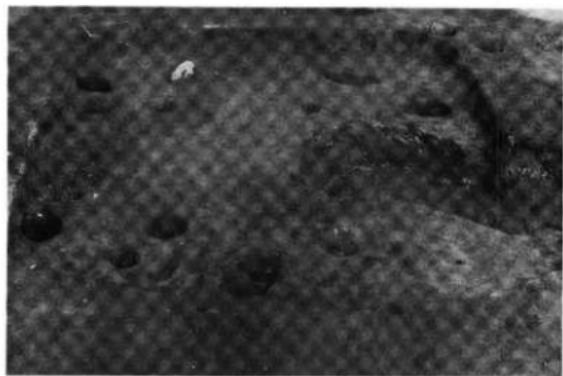
第4図版



1. 第5号住居址  
銅製品出土状況



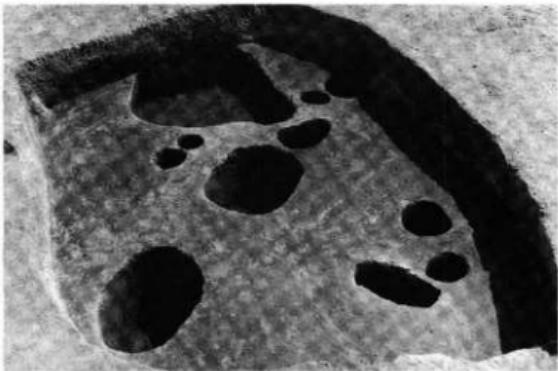
2. 同



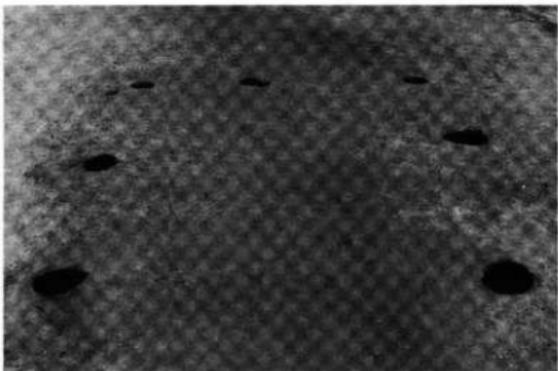
3. 第7号住居址

第5図版

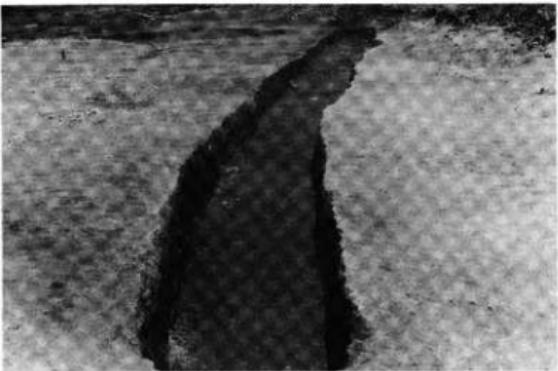
1. 第8号住居址



2. 第1号掘立柱建物址



3. 第1号溝



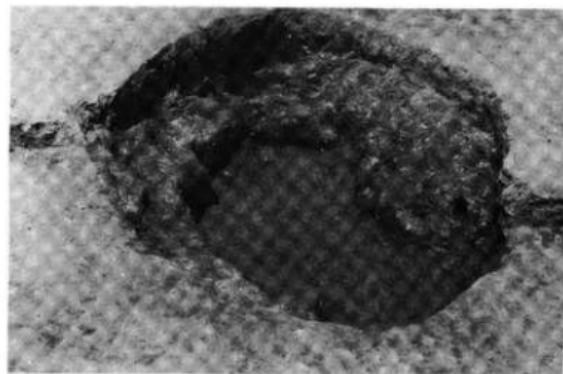
第6図版



1. 第1号集石



2. 第4号土坑



3. 第4号土坑

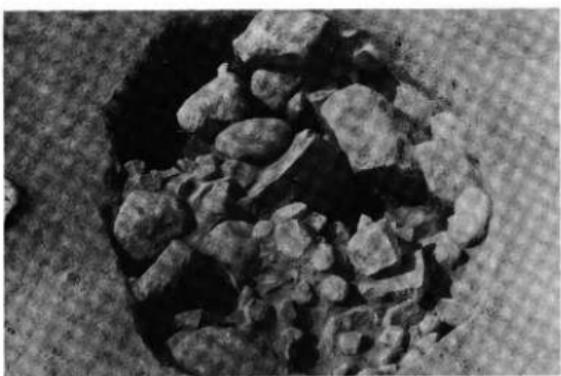
(完掘後)

第7図版

1. 第28号土坑

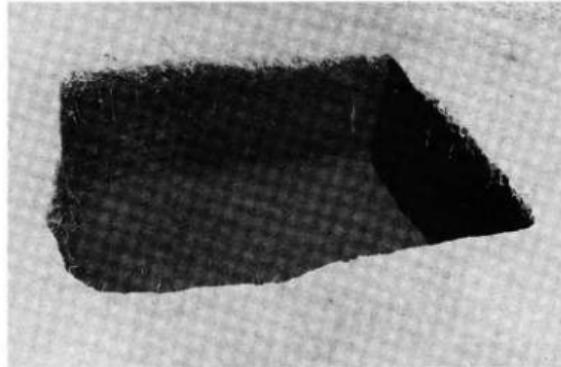


2. 第43号土坑



3. 第13号土坑

(地下式土壤)



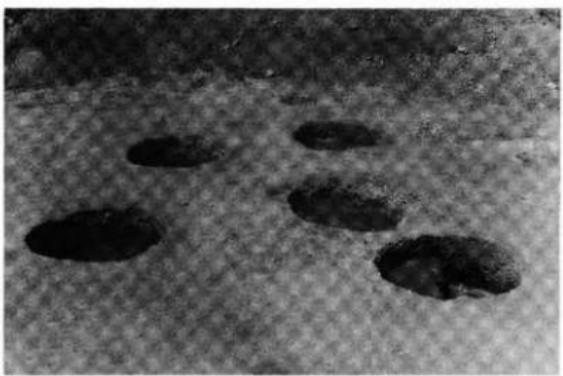
第8図版



1. 第44号土坑  
(地下式土壤)



2. 同



3. 第23~27号土坑

第9図版

1. 第46~50号土坑



2. 五輪塔



長坂町埋蔵文化財発掘調査報告 第3集  
小和田館跡(小和田北遺跡)

発行日 昭和61年3月31日

編集・発行 長坂町教育委員会

印刷 島北印刷(株)

